

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第六十六卷 第九号



9

日本幼稚園協会

〈新発売〉 定価 5,000円



クガツテミタヨ!
ノーパテミタヨ!

●屋内屋外、季節をとわず、どんなところでも
楽しくあそべる新しい運動遊具です。幼児の、
モグラ、ハウ、コロガルなどの本能を充分に満
足させ、きまりを守る安全な体育あそびをとお
して全身運動を活発にさせます。

●特長・本体はピアノ線と高級ビニールターポリン
で特殊加工されていますから、たいへん丈夫です。

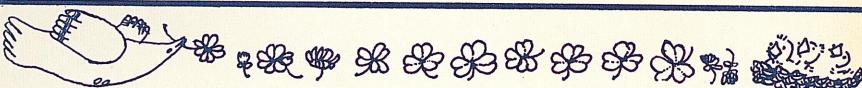
冬でも硬化しません・アコードィオンのように伸縮自在です・中央
部分が透明ですから中が覗けます・簡単に何台も連結できます。

直径 60cm・全長 3m

発売元 創業60年 本社・東京都千代田区神田小川町3の1 株式会社 フレーベル館

キンダー^{キンダ} ファニートンネル

類似品にご注意ください



創業60年記念

主催 フレーベル館

現代幼児教育研究会

フレーベル館

11月例会（高松市）

景勝の地、屋島を背景にして、心ゆたか
に現代の幼児教育をご研究ねがいたいと
存じます。どうか奮ってご参加ください。

講 内 会 11月12日（日） 9時半～16時
日 時 会 場

高松女子商業高等学校講堂

（高松市松島町1丁目14の8）

電 話 代表（31）1219

200円（資料代ほか）

午前・全体講座 午後・分科会

講 師 容 費

秋 田 美 子 先 生
平 井 信 義 先 生
中 島 修 先 生
磯 部 健 先 生

幼児の教育 目 次

—第六十六卷 九月号—

表紙 井口文秀

☆幼児期―学習のためのたいせつな時期―

幼稚園教育の重要性.....ヘレン・ヘフアナン...(2)

遊びすなわち教育.....N・V・スカーフ...(10)

一貫した学習は幼児期からはじまる.....ルース・ムケルジー...(18)

なぜあせるのか.....アニー・L・バトラー...(27)

幼稚園はたいせつである.....マネット・スウェト...(33)

レディネスとは.....エソルイーズ・カーベンター...(37)

幼年期の言語.....ジョーゼフ・チャーチ...(41)

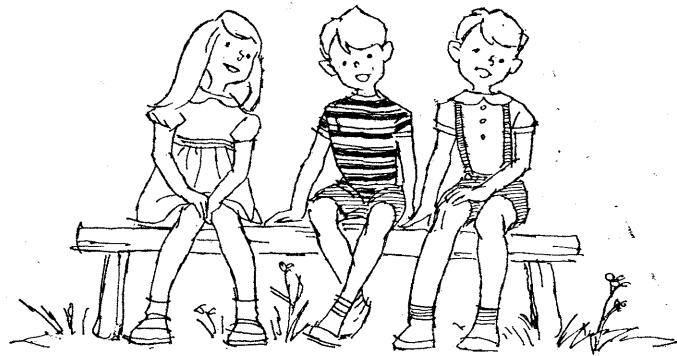
今日の五歳児にとっての文化生活の経験.....メアリー・ジーン・ルーミス...(46)

読み方の早期強制.....ジェームス・L・ハイネス...(55)

欧米の幼児教育⑨
スペイン・ポルトガルの幼児教育.....西本 優...(59)

幼児教育さまざま
ベルギーの幼児教育(2).....足立 寿美...(63)

幼稚園児が異なるた文化環境に適応する過程の記録.....柏木 恵子...(69)



幼稚園教育の重要性

ヘレン・ヘフアナン



ヘレン・ヘフアナンは、カリリフォルニア州教育省、初等教育局長、「子供の教育」編集主任。

これは一九五九年秋、コネティカット州の教師たちに對してなされた講演である。国際幼年教育協会および多くの州は、子どもたちの最初の学校経験として、幼稚園のみならずナースリー・スクールの開設のために努力している。

幼稚園とは何か

幼稚園は、子どもの学校経験のたいせつな第一歩である。幼稚

園での第一日をはじめる前には、子どもは主として家族集団の中で生活しており、近隣やより広い社会には、ほんのわずかしか出ていったことはない。子どもはそれ以前には、ほとんど社会生活の経験を持っていない。いまや、彼は突如として、多くの新しい適応場面に直面する。彼は毎日きまつた時間に、新しい興奮的な

経験に向かって出かけていく。そこでは彼の役割は変化した。そこでは彼は、自分自身を、仲間集団に参加する一員として受け入れなければならない。自分が快く安全な生活をするためには、彼は少なくとも一人か二人の友人と満足な関係を樹立しなければならない。彼は新しいおとな、すなわち教師に適応せねばならない。教師のやり方は、親のやり方とはかなり違つたものであるかもしれない。

子どもは、以前に知っていたよりももっと広い空間、もっと親

密さを欠いた環境の中に身をおいている。多くの新しい魅力的な物を、自分の専用に与えられているのではなく、他人と分け合わねばならない。多くの珍しい、恐怖をよびおこすような物を、使用法の通りに調べてみて、それをどれだけ自分で扱うことができるかを見るために、いろいろと試みてみなければならぬ。子どもがこのすべての適応を、どのくらい幸福感と自信をもつてすることができるかということは、多くの要因によっている。

子どもが新しい場面にどのように適応するかということは、たとえば、社会的成熟度に依存している。彼の行動からみて、子どもがどの程度、他人と仲よくすることを学んだかということを教師は知るのである。彼は見知らぬ場面に身をおくことになれないか、あるいは、そこから逃れて、何か安全を示すシンボルにしがみつくであろうか。彼は直ちに自分から行動をはじめるだろうか、あるいは他の子どもがやることを見ているだろうか。彼がその場に近づくのは、友だちのせいだろうか、あるいは材料のせいであろうか。

幼稚園の教師は——あるいはもっとたくさん——質問に対し、それぞれの子どもについて答えられねばならない。子どもはそれぞれ独自のペーパーナリティーをもっている。教育を効果的にするために、幼稚園の教師は、ひとりひとりの子ども

についてよく知らねばならない。教育は家庭と学校の協同事業であるから、その家庭的背景、父親、母親などについて知らねばならない。教師がひとりひとりの子どものことをよく知るほど、教師は子どものためによく尽すことができる。教師が子どものことをよく知るほど、子どもが現在発達しているところに立って、これから先の進歩に合理的な期待をもつことができる。

幼稚園の年齢の子どものグループは、どのくらいの大きさであるならば、一人の資格のある教師が個々の子どもの要求を知ることができ、彼らに適切な学習経験を与えることができるものであろうか。おそらく、特定の数を示すことはできないだろう。その数は物理的環境にもよるし、親の参加の程度や教師の質にもよるであろう。われわれの経験からは、一日三～四時間の教育で、二〇人～二五人以上でないことが望ましいといえる。そのくらいなら、しばしば親と会合する時間をもつこともできるし、子どもの学習経験に適切に備えることができる。

アメリカは幼児たちにこのような教育のプログラムを与えることができるだろうか。全世界の人口の七バーセントを有し、全世界の四〇バーセントから五〇バーセントの間の富を持っているアメリカならば、その欲する教育を子どもたちに与えてやれるはずである。しかるに、われわれが教育に対して費やしている費用は、

国の金予算の四パーセントにもみたない。ロシアはその二倍も費やしている。ノールウェーのような小国が、全予算の一三パーセント以上を教育に費やしている。われわれが教育をいかに評価しているか、また、この人生の最初の時期が将来のバーナリティ、知的能力および情緒的適応にいかに重要な意味をもつかどうことについて、どれだけその重要性を認識しているのか、疑問をもたざるを得ないのである。

幼稚園の教師はいかに重要であるか

子どもが幼稚園に適応するための主要な要因は、疑いもなく教師である。すべての親がその子どもを託したいと思う教師は、子どもを理解して愛する人であり、健全なプログラムを遂行するのに必要な専門教育をうけた人である。教師は子どもが社会の一員となるのを助ける重大な責任を、もつてゐるのであるから、われわれの文化をよく知り、それを真に理解した広い教養のある人でなければならない。鋭い感覚をもつた教師は、現代の科学技術の進歩は、子どもが住んでいる世界をも、驚くほど加速的ないきおいで変化させつつあることを知っている。故に、教師は子どもが科学の世界を理解し、そして変化を当然のものとして期待し受け入れるのを助けるのに重大な責任を負っている。

教師は、人生を子どもにとつて豊かなものにするためのすべての興味は、早くより養わなければならぬことを知っている。そこで教師は芸術や文学、音楽や身体リズムに興味をもつてゐる。教師は、子どもたちとも同様の興味に、導く方法を学んでいる。

教師はまた、その専門職としての準備の期間が終わっても、幼稚園教師としての教育には終りがないことを知っている。それは医者でも、技術者でも同様であり、人間の発達のどの段階であろうともそこに献身した教師は、その現場において教育されつづけているのである。そしてその最前線にある人々の研究と経験とは、われわれの子どもに関する知識および、その適切な発達を促す方法に関する知識を、日日加えているのである。

それ故に、良い幼稚園教師は、自分自身が常に学習しつづけることができるような専門職を望んでいる。このような学習は、大学における計画された公式の研究の機会によって、あるいはまた、同じ専門の仲間のグループや親との非公式な研究の機会によつてなされるであろう。しかし、何よりも、教師の専門家としての成長は、生活共にしている子どもたちを観察することにより

洞察を増していくことによって行なわれる。専門職として、幼稚園の教師の仕事ほど困難な教職はないし、また幼稚園の教師の仕事をほど、国家と全世界の将来にとって、社会的に意義のある仕事はないであろう。

教師の個人的な生活の面からいふと、幼稚園の年齢の子どもと共に生活することは、労力のいる仕事であり、元気にあふれた健康と、はちきれるほどのエネルギー、軽快な精神および戸外を楽しむ心を必要とする。

一日に三時間か四時間、一週は五日間、一年で一八〇日以上の日を幼稚園の子どもとともに生活するためには、幼稚園の教師は、四歳から六歳の子どもたちに心から愛情を抱いていなければならぬ。教師は子どもたちを理解しようと努力することを楽しむことができなければならぬ。子どもとともに仕事をすることを好むものでなければならない。

もしも身体をもじもじ動かしたり、足をぶらぶらさせたり、どこでもおかまいなしにあくびをしたり、ひつかいたりするような子どもの行為に耐えられなく感じたり、あるいは、教育の対象である人間よりも教科の方により多くの興味を感じるようであるならば、その教師は人生の進路を誤つたのである。その人はもつと彼女にふさわしい職業を求めるべきである。しかし、もしも教師

が、ひとりひとりの子どもをすばらしい魅力的な存在としてみることができるならば、また、子どもがその可能性を実現し、周囲の物理的、社会的世界の中に自分自身の位置を見出すのを助けることに一役買いたいと願うならば、その教師は子どもの成長と発達をみるとことによって個人的な満足をむくいられるであろう。

幼稚園の教師については、いくらでもいうことができる。彼女はハリウッドの映画俳優のように美人でなくとも、四歳と五歳の子どもの目には、世界中でもっとも美しい婦人として映るであろう。彼らは教師のしぐさをまねし、彼女のことばづかいや声の質を自分のものとし、彼女の理想を受けいれ、彼女が尊敬するところがらを愛するようになる。人として生まれて、これ以上に人生を賭けるにふさわしい仕事があろうか。

しかし、子どもとの関係においては、温かく、前進的で愛容的な教師が、いまや、立ち上がり、幼児教育を擁護せねばならない時がきた。現代の世界の不安定と不安感とは、子どもが生理的にも理屈的にもレディネスのできていない、そして子ども自身もなんら必要を感じていないカリキュラムを押しつけようとする試みとなつて表現されている。われわれは、IQ100の完全に「正常な」子どもは、六歳六ヶ月になるまで、読むことを学ぶことはできないということを証明する多くの証拠をもつていている。子ども

を駆り立てようとする試みは、たしかに読むことを早めることにいくらか成功するであろう。しかし、それによつて生理的にも、心理的にも、過度の負担をかけ、読むことに対する興味を失わせるかもしれないという危険を犯している。時が熟すれば、子どもはたやすくそれに習熟することができるのである。

どのような学習経験を幼稚園は与えなければならないか

それでは、幼稚園はどのような学習経験を与えねばならないかという質問が当然起つてくる。いまではよく知られている四歳児、五歳児の特質に照らしてみて、どのようなカリキュラムが適当であるのか。この質問に対して、あらゆる部門の十分な資格を備えた専門家が注目してきた。

だれも周囲の世界に適切に対処できるような能力を生まれながらに持つてゐるわけではない。現代の世界は、子どもが人生にうまく適応するのに必要な能力を、成長の過程で自然に学習することを期待するのには、あまりに複雑な世界である。人間としての資質や、その属する社会集団に貢献する能力は、子どもの経験と、

教師の用意する学習の機会によつて作られる。教育においては、量も質とともに重要なである。幼児期の最初の社会的、知的、情緒的経験は重要な意味がある。この時期に子どもは、将来も当面するであろう多くの人生の場面に遭遇し、あるやり方でそれを解決する。たとえば、子どもは家族とうまく生活することを学ばねばならないし、後には、家族圈を越えて他の人々と生活することを学ばねばならない。子どもは生存するために、基本的な健康と、安全な行動を学ばねばならない。彼は次第に強くなる要求をみたすのに十分な言語のコミュニケーションの技能を獲得せねばならない。彼は移動能力が増大して、物理的・社会的環境と直接に接触する範囲がひろがるにつれて疑問に思うことに解答を見出さねばならない。

幼児のためのカリキュラムは人生そのものと同様に幅のひろいものである。主目的は、子どもが人生に最善の適応をすることを助けること。すなわち、その子どもの人間としての可能性を十分に伸ばすことである。学習に役立つ場面で、子どもはその経験を広げ、また、その経験の中で子どもは自分自身を見出すように励まされる。子どもは与えられた具体的な材料を使用することを励まされ、その感覚的印象を直して理解を深めていく。幼稚園は幼児が自分自身であつて安全な環境を与える。また、友人とともに生活することを学び、幼児の性質や要求を理解する専門家によって計画され、整えられた環境を十分に自分のものとすることを学ぶ

べるような環境を与える。

教師は、自分の教育はこれでよいのかを確かめるために、子どもの行動が変化したかどうか、次のような点について自問してみるがよい。

彼らはより健康になつたか。

他の子どもやおとなとの関係はよくなつたか。

コミュニケーションの技能をより多く学んだか。

子どもはより独立的な行動がとれるようになつたか。

自分自身の身のまわりのことや、自分の行動について、より多く責任をもつことができるようになったか。

物の世界についてよりよく理解するようになつたか。

科学の世界についてよりよく理解するようになつたか。

幼稚園が、それぞれの子どもに可能な範囲において、十分にこれら目標を達成するならば、一部の明瞭を欠いた、しかし大声でめきたてる人びとが要求するように、幼稚園のプログラムを「もっと高度にする」ために時間を費やす必要はないのである。幼児の仕事に専念する人びとは、実際の幼児をよく知らない皮相的な批判に動かされて、誤った行動に走ることのないようになければならない。

よい幼稚園のプログラムは、すべての子どもに次の一〇の重要なことを考えねばならない。

真の問題は何か

- …… 健康を維持し発達させること
- …… 身体の発達を促進させること
- …… 社会生活についての理解をひろげること
- …… 科学の世界にはいること
- …… 空間的、量的関係の理解をすすめること

…… 言語の使用力を広げること

…… 文学的遺産を知り、楽しむこと

…… 芸術的媒体を通して、自分自身を美的に表現すること

…… 音楽的遺産に親しみ、それを楽しむことを学ぶこと

…… おとなや子どもと満足した関係をつくること

第一に、すべての町で、われわれは幼稚園教育のための物的設

望む専門家や一般の人びとは、明瞭な考え方をもっている。われわれは今までのような変化が必要であるかを知っている。また、われわれは、幼児教育の真の問題は何であるかを知っている。

備をよく検討せねばならない。

幼稚園教育の向上に関心をもつ人はだれでも、施設設備の問題と正面からとりくまねばならない。ある批判者がいうように、教師は五歳児から七歳児をつくり出すことはできない。

しかし、われわれは学習の条件を改善することはできる。それ

によって、すべての子どもは、成熟段階に応じて、適切な発達をすることができる。

第二に、われわれは、幼稚園における健康のための方策をよく

検討せねばならない。

入園の前に医学的既往歴や検査の資料をそろえてあるか。予防接種はしてあるか。毎日の健康管理はよいか。風邪や病気の徵候を示す子どもを隔離する施設があるか。換気、保温、日当りなどの条件は、健康の促進に役立つものであるか。栄養のためのプログラムは計画されているか。設備は安全の観点からいって最善の状態であるか。身長体重の測定は毎月定期的に行なわれているか。ここにあげたのはみな、われわれが尋ねてみて答えねばならぬ問題である。われわれは、このような問題のすべてに対して、何かをすることができる。しかし、批判者たちは、われわれが直ちにすることのできるような地についた質問については、ほとんど興味を示さない。

第三に、われわれの幼稚園で備えている遊具や材料のことを検討せねばならない。

われわれは運動技能を促進させるために活動的な遊具を備えているか。——シャングルジム、ぶらんこ、箱、平均台、檻、車、三輪車、手押車など。

われわれは、手で操作したり、構成したりするのに適當な材料を備えているか。——つみき、砂箱、粘土、木工道具、パズルなど。

われわれはここで遊びを刺激するのに適當な材料を備えているか。——家具や玩具、電話、自動車や電車の玩具、絵の具と画架、楽器、絵本、科学的経験のための材料。

われわれはこういうものについて、いろいろと考えを出すことができる。われわれはそれを買うこともできる。両親はそれを作るので手伝ってくれる。しかし、幼稚園で子どもたちのためにもっと教育してほしいと望んでいるようなところで、環境や材料は案外見過されている。

第四に、幼稚園は教師次第でどうにでもなる。われわれは職員のことを検討せねばならない。

明らかに、よい幼稚園教師は、熟練した専門家である。彼女は子どもの立場に立って、子どもを理解する。彼女は、いろいろの

教育的 possibility をもつた環境を作れるように、多方面にわたって知つていなければならない。彼女は学習のための良い状況を作らねばならない。彼女は個人差を認知し、個人の要求に応じることができる。彼女は、子どもの学習に必然的に伴う緊張ができるだけ小さくてすむようにすることができる。彼女は子どもを危険から守る。彼女は、毎日くりかえされる日課であまり時間をとりすぎ、ないよう、うまく運営することができる。

われわれは、このようなことをすべて幼稚園の教師に期待することができます。それはできると答える。しかしそれには条件がある。われわれは、一クラス二十五人という方針をうけいれて、実行せねばならない。われわれは、幼稚園の教師となるための教育のレベルと年限を、小中学校の教師と同等にまで高めなければならない。われわれは、最高の質の教師を確保するために、彼らが魅力を感じるような十分の給料を支払えるようにする必要がある。そして、「小さな子どもなど、だれでも教えることができる」という迷信をぬぐい去らなければならない。幼児を教えるために要求される資質は、どの段階の教育にも必要とされる資質と同じ程度に高度のものなのである。

第五に、われわれは家庭と幼稚園との協力を向上させる必要がある。

すなわち、入園前に親と面接すること、親の参観、非公式な家庭訪問、一年に二回は親と個人面接をすること、親と教師の会合、親のための回覧図書制度など。

第六に、われわれは常にカリキュラムに関心をもたねばならない。

幼稚園の教師は「子守り」ではない。彼女は、(1) 物理的、自然的環境についての学習をすすめ、(2) 人間とその活動についての学習をすすめ、(3) 健康と自立の習慣をすすめ、(4) 絵画製作や音楽、文学などの芸術的経験や創造的活動をすすめることに可能な教育者である。

専門家は現在の知識の上にかたく立ち、仮説を検証するためのパイロット・スタディにもとづいて新しい方向に研究をすすめていくのである。多くの批判者たちは、現代の世界の科学の業績に拍手を送る。しかし、教育内容や教育方法の変革を提倡するに当たって、科学者が払うのと同様の注意深い検証の時期が必要であることに気がついていない。健全な幼稚園のプログラムについて、現在確立している原理に立って、改善をすすめていくならば、十年先には、幼児教育はさらに大きな進歩をするであろう。

遊びすなわち教育



N・V・スカーフ

ブリティン・コロンビヤ大学教育学部長、N・V・スカーフ氏は去る四月インディアナ
ボリスにおいて開かれたACEI研究大会においてこの講演を行なつた。

この発表の目的は、遊びとは精神のもつとも完全な教育的プロセスであることを示すことである。

学説について

遊びとは、個人ひとりひとりが知識を獲得するための精巧な計画であるともいえるのである。遊びはそれ自体のために行なわれるいきいきとした、創造的な意図のある研究活動であると述べることもできる。

また遊びはすべて自然なものであるから、特定の時や人による文化的な社会倫理によって評価されるとき、かならずしも道徳的であるとは限らない。

遊びはけつして単純なものではない。また、ひとつやふたつの資料を引用して説明したり解釈できるものでもない。事実、遊びは人間が複雑であるとおなじように複雑なものである。遊びに関するいろいろの学説が唱えられたし、これらに対し批判も種々であつた。動物の研究から端を発したK・グロースの本能的練習説は遊びを成長発達に欠くことのできない重要なものとしているから大いに推薦に倣するものである。彼は種々の動物の進化の段階

によって遊びの差異があることに気がついた。幼児期の長さに関しては高等動物の方がより長く、それに伴い遊びも広範囲に、またより長く行なわれる。しかし、K・グロースの説は人間の子どもにとってはあてはまらない。

なぜなら成人人期の複雑な活動を練習することは不可能であることは明らかだからである。しかもこの説はおとな遊びとは何であるかということを説明していない。しかし遊びは成長を伴うものであると唱えたK・グロースの考えにはいまだに根本的な重要性があることは認められている。

また、G・ホールの反復発生説も、遊びについて部分的とはいえ、注目すべき主張をしている。しかし反論するならば、おともども子ども遊びにおいて反復する要素と共に創造性という重要な面をもっていることを指摘したい。

遊びの機能をあまり十分に説明しているとはいえない説に、過剰エネルギー発散説がある。子どもは遊びの時に余分の精力を発散させることはたしかであるが、消費されたエネルギーは遊びがもたらす喜びと夢中になる楽しさにくらべれば、単なる付随的なものにすぎないのである。

もともと妥当な論説としてあげることのできるのは遊びを教育的な研究活動と見なしているものであろう。しかし、一般の人びとが考えている遊びと仕事の意味について混乱があるのでまず第

一にその点についてとりあげてみよう。

遊びと仕事

遊びと仕事は正反対のものではない。たびたび一致するものではあるが、しかし、別々に測られるべきものである。仕事は身体的働きの量で測量され、遊びは感情的かわりあいの質で測られる。不幸なことに、一般的のいい方では「仕事」というと言外の意味としてある感情的なふくらみがあるようである。すなわち、仕事はどうしてもやらねばならない、まじめな重要な活動であり、遊びとは弱い人びとがむさぼる時間つぶしのつまらないものであると考えられている。これは事実に反し、非常に誤った説明である。なぜなら、ある活動が遊びとして好ましい特徴をもつて行なわれる場合、そのために努力がより多く払われ、仕事がより多くなされるからである。仕事と遊びは反対のものではなく、まじめな遊びにかなりの努力が払われるときにはじめて最もよい教育が行なわれるのである。このことへの理解が早ければ早いほど、教育の世界にとつてまことに好ましい結果となるであろう。

治 療

過去においては精神障害児の不安や心の動搖を理解しようとも

て遊びの治療的側面があまりにも強調され、こうした傾向により遊びは精神障害や不適応児のための治療法として必要であると考える人びとが現われてきた。彼らはこうした子どもたちが、遊び機会と自由を与えられないで病気になつたという事実を見逃してしまっている。食物が子どもの身体的発達に必要であるとおなじく、遊びも子どもの精神衛生のために欠くことのできないものである。

教育

「」においてわれわれの関心事は「平常児」の遊びにおける明確な価値づけということにある。いいかえれば教育における遊びの偉大な価値を認めることである。また、教師たるものは遊びによって得られるものを、子ども個々の自己教育のために備えることがどんなに重要であるかを知つてほしいのである。

いうまでもなく遊びこそは教育のもっとも良い型である。ニューヨークの元キャロリーン・ザックリー・インスティテュートのローレンス・フランクによれば、「遊びとは、本質的にいつてパーソナリティーの発達である。この発達により、この世に生を受けた個々の有機体は、やがて社会秩序のある象徴的文化世界の中に、積極的に生活する人間となっていくのである」子どもの遊び

とは彼独特の方法で探究や体験をしていくことである。その間に子どもは自分との世との関係を築いていくのである。このようにして遊びに没頭しながら子どもは学ぶことを学んでいくのである。また、世の中の事柄どのように取り組んだらよいか、あるいは話のおりあいをつけること、技術をマスターしたりすることも発見していくのである。また信頼をどのようにしてかち取るかを学んでいく。子どもにとつては社会的な型にはまつた文化生活のきまりを、そのまま受け入れることは易しいことではないので、空想に逃避する場合も多いが、このようにして子どもは遊びを通して自分自身を新しく発見していくのである。

遊びとは一つの学習活動である。遊びは言語によらないコミュニケーションの一つの方法となり、子どもの心の欲求を満足させる比喩的なことばとなるのである。遊びがなぜ教育的であるかといえば、子どもが遊びに従事しているあいだ、子どもは自己目的的に動き、遊びに浸りきっている。子どもは遊びにおいて自分自身を忘れ、心をうばわれて夢中になることができるものである。

遊びは事実、すばらしい教育的過程のあらゆる特質をもつてい る。かなりの時間にわたって集中力を要する。また積極的な想像力を持続した興味が必要である。遊びをしている間は強力な知的

興奮とともに感情的に浸り切った状態にある。これほど反復をする活動もないだろうし、これほどペーパーナリティーに目立った進歩を与える活動もないと思われる。人間の中に隠れている努力とエネルギーの資質をこれほど呼びさせる活動もないだろう。

遊びは子どもの体ばかりでなく、知、情、意の面にも影響を与えるもので、教育的過程の中でもっとも重要なものである。遊びにおける経験が学習を誘発し、学習が子どもの人格と知恵をつくる。このようにして遊びこそがすべての教育過程をもつともよく生かし、完成に近づけるものとするのである。

創造性

教育のもっとも高度の形における基本的な要素として実験的研究、創造活動、情緒的成熟があげられるが、これらは遊びや仕事のもっとも高度な形もある。そこでつぎに教育について考える必要があると思う。

われわれはいつも就学前教育において遊びを受け入れる用意はあるが、遊びの精神が高学年や成人教育に至るまで持ちづけられるよう懸命な努力を払っているかどうかは疑わしいものである。遊びの精神が人の成長の中で効果をあげ、持続的であるためには人間の持っているすべての考えが、何か明確な形で創造的に

表現されなければならない。これは時にレクリエーションと呼ばれるが、けっして模倣ではない。すべてのレクリエーションはそれを行なう直接の人あるいは遊びそのものの個々の創造性が記入されているのである。

教養のある人というのはその人の知的労力が性格形成、態度の発展と美的感受性にまで進んだ人のことである。あるいはアリストテレスがいうであろう「ちえと道徳をそなえた人」である。かの故ボイド・ボーデは「教育が単に知識や技術の習得であるだけにとどまらないということは周知のことである」といっている。

また「もし態度や判断力が少なくとも学習ということと同等くらいに考えられないなら世の中に益するところは少ないだろう。学習されたものが意義をもつためには、そのことがらが学習されるだけでなく、感情や行動におきかえられなければならないのである」ともいっている。このことは、遊びの精神と特質を用いてのみ可能である。学習が態度や感情に影響を与えなければ、それはよい完全な教育とはいえない。遊びについていえる利点は遊びはすべて子どもの全人格を包括しているということである。すなわち、子どもの態度、性格、感情を変化させるものである。それは知的活動から感情的包含へ変化していくことであって、これこそが正しい教育の、また遊びにおける真の特質なのである。この重

大な変化は創造的、芸術的活動においてのみ行なわれ得るのである。遊びと教育における芸術的、創造的要素が大切な理由がここにあるわけである。

研究

遊びは練習や反復やエネルギーの過剰を含むものであるとしても、これらよりは、より以上のものである。遊びは根本的にいえばひとつの研究活動である。また冒険であり、経験であり、ひとつの交換的プロセスともいえるものである。遊びは内なる好奇心と疑問によってモーティベートされている。子どもがどのように生きようかと発見しようとする気持の表現である。遊びには発見の遊びと創造の満足感がある。

もし遊びが研究活動として解釈されるなら子どもにとつては大へん重要な活動と考えられるし、おとなにとつてはその精神活動を刺激するにはもつとも必要なものとなるだろう。

芸術性

遊びがこの世における一種の研究活動であることと、子どもにどのようにして生きるかを見出させるための自然のしくみであることについてはかなりの紙面を尽したと思う。つぎに遊びの芸術

性について述べる。遊びの素晴らしさはそれが、それ自体芸術的であり、自發的であつてしましばら外の欲求とか刺激とは無関係であることを指摘したい。多分遊びの自發的性格により、そのアンチテーゼとして「仕事」ということばが一般につかわれるようになつたのだろう。つまり一般に仕事というのは外から強要された努力であるか、または他人から決められた活動であるかである。それにひきかえ遊びは自由である。なぜなら遊びにおける子どもの活動はまだ拘束されないものでやや試験的であり、探検をしてすぐまたやりなおしてみたり、放棄してまたおきかえたりする余地があるものであるからであろう。遊びにおいて子どもはおとなに強いるよりはるかに少ない制限で物や事件やときには、人物でさえも自由自在にあやつることができる。遊びについては以上のとおりであるが、仕事というのも遊びと同じ特質をかねそなえることは同様に可能のことなのである。ショウが定儀づけた教育的ユートピヤとは「仕事が遊びで遊びがいきがいであるところ」である。

子どもの幻想にはもともと発明の才があり、自由奔放なものがある。都合の悪いことでも思ふがままに想像してみることができ。とはいいうものの想像の世界からは実に精神的、知的氣力も出てくるのである。子どもは自分をとりまく物の世界は手で触れた

り、直接経験で探知していく。それに対して、人間社会について

は「ここ遊びまたは幻想遊びともいえる精神的経験を通して研究

していくのである。

思 考

ピアジェは遊びにおける思考の価値を強調している。彼は想像遊びは純粹な状態においては、自己中心的思考であるといつてゐる。彼はまた、子どもは自分自身のプライベートな現実を楽しみたいともいつている。この現実は子どもによつて、全く自然に無理なく信じられている。なぜならそれはエゴの住む世界であるからである。しかも遊びの働きとはこのエゴの世界を、子ども们やりたくない無理じいのことから、子どもがやりたい現実の生活へと守るものであるからである。

研究のもつとも高度な形は本来は遊びである。

ものごとを考えるにあたつてアインシュタインの言として次のものが引用されている。

「試行錯誤を試み、論理的につながつた概念に到達しようとするのはつまり、基本的な仮説をもつていてこれを漠然ともあそぶのと同じ考え方である」この組み合わされた遊びが、ものごとを生産的に考える基本的なものとなるのである。

遊びへの備え

もし個人を教育する手段として遊びがあるとするならば、教師はどのように行動すればよいか。実際問題として、子どもが自由な体験によって世の精神的秩序の価値を發見することと、教師が直接指導を与えるのとどこに線を引くべきであろうか。遊びの活動にしつけや道徳性をどのようにしてもりこむことができるか。

明らかに学校における教育方法は、慎重に特定の目的をもつていなければならない。すなわち、知的あそびや実験や、自己主張の確固とした実際の発達へと進ませるように刺激を与えることをねらう必要がある。子どもが彼自身の限られた力とベースで、自分なりの成熟の道を見出す必要があると、力説してもしすぎるところはない。子どもに十分に遊びを与えると同時に、子どもの尊厳を認めておとなの大関心あるいは強制によって、子どもの誠実さをふみにじらないようにしなければならない。教師は子どものパーソナリティーの発達を阻止したり、ゆがめたり、早まつて過度に発達させたりしてはならない。教師は子どもの動物的行動を社会的行動に変化していくために、どのようにして励ましを与えていくか？

教師のつとめは遊びを指導することではなく、建設的な自由を

与えるためにじやまものを除去することにある。もつとハッキリいうなら教師は子どもたちのそれぞれの発達段階における能力や興味を知つて、材料や場所、チャンスや経験を与えるのである。教えることは個々の自發性を開発させるものでなければならぬ。教師は訓戒や命令で動くのではなく、暗示と例を示すことによつて行動すべきである。したがつて教師は積木、粘土、絵の具、水、砂、紙、空間、時間、自由と愛情を与える必要がある。教師は子どもが自然に学びたくなるような、また遊びたくなるような環境を整えたり、また、自然に教育への影響づけが行なわれるようまわりの状態をとのえたりする。教師は子どもの自發性や探究心、知的好奇心、あるいは創造性と自由などにたちいらないように努力する。教師は子どもが彼自身の経験とパーソナリティによって創り出した精神的な雰囲気の中で子どもの劇的な自己表現ができるように励ましてやるべきである。

遊びの精神はすべての人間性にとって欠くことのできないものである。それは人類の大方の幸福の根柢をなしている。人類が創造的、科学的、知的また社会的に進歩する手だてである。遊びの精神は幼児期にとって大切であるばかりでなく人類全体にとっても重要である。子どもの遊びを理解することによって子どもの全人格を教育するプロセスへの鍵を見出すことができる。高度な文

明社会に住んでいるので子どもたちのすべての遊びは、材料とともに助言ややさしい心くばりを、自由と共に場所の広さを与える。思いやりのある理解力に富んだ先生を必要としている。そのような教師であれば、きっと子どもたちがすすんで自分たちで創造的に自由に経験してみることのできるようない行動やしつけの基準を具体的に示すことができるだろう。

「遊びと子どもの発達」より抜粋

何げない観察者にとって遊びが無目的に見えるようなときにおいてさえ、子どもは後に彼の活動に方向づけとなるようなことをつぎつぎに練習しているのである。

もし子どもが、身体的な世界をマスターするだけであれば比較的ややすいことであろう。他の器官とおなじく、子どもは神経系統や感覚の識別のための能力を遺伝されている。しかし、子どもの器管は役に立つために人間化されなければならない。子どもはわれわれの象徴的な文化世界に住むことを学び、事物や行事や人に反応することをおぼえ、微妙複雑な人間関係や各自の目的にむかって求めたり努力したりしなければならないことを学んでいくのである。子どもは遊びを通してこれらのことたえまなく練習

をし、果てしなく探険し、おとの世界と同じように似たものにつくりかえられるものはすべて手がけて経験していく。

子どもはしばしば混乱したおとの世界にとりくもうとしながら、いろいろと変化のあるシンボルのつかいかた、ことごとばの意味について知ろうとする。彼は遊びの材料やゲームの中でのおとの世界を模写して、創造的に自分自身の限られた力や技術や理解力にもとづいて修正できる小宇宙を造り出していく。ことば遊びを通してことばやいいまわしのいろいろの組合せを試みながら口に出して、あるいは出さないでこれらのことばのシンボルやコミュニケーションを練習していくのである。

このようにいろいろのまた何におきかえることのできない遊びの機能がつくとき、実存する子どものペーパーナリティーの発展のため、また子どもの将来の土台となる最初の教育のために、遊びの材料を準備することがどんなに大切であるかを思はされるのである。子どもたちにはいろいろの玩具やゲーム、遊びの材料を得られやすいようにしておき、個別または集団遊びの機会を与えてやる必要がある。彼らは種々の材料によって自分たちのもつている口に出すことのできない、また出そうともしない混乱した問題や、おとの説明ではなつとくのいかない情緒的な問題を出しつくすために種々の材料をつかって探究したり、経験した

りする自由が必要なのである。これらの異なったいろいろの目的のために遊び道具は広い範囲で、ことに「組みたてられる」材料が必要である。たとえば——積木、粘土、砂と水など、これらを通して彼らは持っている夢とか創造的な空想をあらわし、また各々の感情や抱負を表現することができるるのである。

われわれが子どもの遊びのために備えるもの——それは広く、時間、設備や遊びの材料であつたりするが——こういふものはわたしたちが自發的な幼児期における経験の重大な意義に対する認知と理解力のほどを示している。また、おとのおしつけや不必要的制約のない遊びが子どもにとつてどんなに必要であるか、彼自身のためにもつとも必要であり、好ましいものを彼自身のペーパスで学習していくことができる。もしいたずらにおとなから抑圧されたり、いらいらさせられたりしなければ、新しい経験に進む用意ができた時、子どもは自分自身で玩具や遊びから離乳していくだろう。遊びを通して子どもに彼自身の成熟の段階や発達途上の障害を示すものである。

☆ローレンス・K・フランク「遊びと子どもの発達」——『子どもの仕事、玩具とゲームへの手引——乳児より一歳まで』より抜粋（A C E I ウシントン D・C・一九六三）四〇、五頁

一貫した学習は幼児期からはじまる

ルース・ムケルジー



ルース・ムケルジー氏（ニューヨーク市立大学ブルックリンカレッジ教育学部）が、一九六五年二月、校長年次総会開催中に催された国際幼年教育協会と全国幼児教育協会共催の昼食会において語ったもので、国際幼年教育協会の方針と目的に触れながら、幼児教育の位置付けを明らかにしている。

たちの良心はこれを見過ごしにすることを許さない。

今や幼児教育の時代である。私たちは、教師としても管理者としてもあるいはまた研究者としても、にわかに世間の注目を集めている。このように幼児期が新たに強調されるのは、それだけの理由がある。現代社会の問題のいくつかは、さしあつたものが

ある。学校をやめても仕事がないばかりか、変化の激しい労働市場では、使いものにならないという事態さえ起こっている。民主主義の価値は、あらゆる面から試験を受けているということがで、不景気な都市や農村での生活の影響や、貧困や人種差別の影響が、あちらこちらに個人的な悲劇となって現われ、もはや私

私たちは、今ここで大勢の力を合わせてこうした問題の全体的な性格をとらえるプログラムを発展させようと、皆で考えをすすめているのである。プログラムを効果的にするには、幼児期から、しかも私たちが考へているよりもっと早期からはじめるべきだ、という意見があふれていることは周知のとおりである。社会学者、経済学者、政治の指導者、労働界・産業界の代表の人たちが、この新しい状勢の中で教育者や他の社会科学者と何らかの関

連をもちはじめている。焦点は、次第に下降しつつある。青年期から児童期へ、そして今や児童期（小学校の低学年から三、四歳の児童）にまで下ってきた。

児童の発達は連続的なものであり、新規の学習は以前の学習を基礎とし、先の学習は次の学習に影響を与えていく。ここに、当然、学習の一貫性という考えが出てくる。児童期の潜在力を活用しなければならないという論議は、必然的に出てきたということができる。

このような問題は、単一の機関で解決できないことは明白であるが、学校は子どもが直面している問題に取り組む特別の義務があるといつてもよいだろう。私は、恵まれない状況のもとにある子どもの特殊な問題のことをいつているのではなく、子どもが私たちの複雑な社会にはいつしていくのに当面しなければならない共通の問題についているのである。すなわち、成長すること、社会人になること、生活し、学んでいこうとする意欲をもつこと、独立すること、社会的責任をもつこと、一個人の人間として自分自身に満足すること、などの問題である。現代社会のいろいろな圧力が、児童教育の重要性と潜在力に気づいてきた現在、学校は一貫した学習計画によって児童期をいかに活用するかという問題に取り組まざるを得なくなつてきている。

問題点

私たちは、次のような問題について考える必要がある。児童期のプログラムには、児童教育実践の基礎になる研究や経験による発見が考慮されているのだろうか？ 私たちは、なれあいという居心地のよいわだちの中にはまっているのではないか？ どんな問題でも解決しますというマディソン・アベニューの宣伝商品にあやつられているのではないだろうか？ 以上あげた問題は一九六五年の問題である。しかし、私たちはプラトンの時代からおよそ二千年もの間くり返し問われてきた基本的問題についても考えるべきである。児童教育ではなにができるのか？ またどんなことができないのか？ 就学前の教育には、不可能なことまでも期待するという誘惑に陥らないようにしよう。むしろ、どんな特徴と内容をもったやり方なら児童教育はすべての児童の連続的学習を改善するのに役立つかということを考えてみることにしよう。

補助プログラムについて（訳者注）

貧困地域のすべての三歳児と四歳児を学校に入れて、必ずしも今までの生活をガラリと変えることはないだろう。どんなプログラムを補うならば有効なのであろうか？ プログラムの内容が子どもの生活や問題と関連がなくとも、十分に豊富な言語環境を備えればそれでよいのか？ 補助プログラムの方法は、教育的な

差別待遇を小さくするというよりは逆に大きくすることになってはいるか？ 私たちが、幼児のクラス分けを、単一な社会経済階層に限るならば、子ども同士で模倣しあうという学習の要求を無視することにならないだろうか。

訳者注 米国では、貧困地域の幼児のために集団的に教育するプログラムが実施されている。そのことをいう。

個別指導について

幸いにも、私たちは子どもの一般的な発達の型を知っている

し、一般的な成熟の順序を知っている。また、それぞれの発達段

階や、年齢的な特徴に大きな幅のあることは、多くの資料が示す

ところである。このような基礎知識のおかげで、私たちは「数の魔術」にとらわれないですむのである。すなわち、ひとりの三歳児が、たとえば足を交互に出してスキップができるたり、二、三語読めるからといって、すべての三歳児はそれができるはずだから、教師はすべての三歳児にそれができるように圧力をかける（もちろん熟練したものであっても）義務があるというような考え方にならないですむのである。

経費と人数について

集団指導における個別指導を考えるとき、「教授—学習の効果をもつと生産的にするには、教師と児童との比率はどれくらいがよいだろうか」ということを問うべきであろう。最近の補助プログラムでは、五歳児で教師ひとり当たり受け持ち児童数を十五人と設定した上等のものである。また、四歳児で一対七、三歳児では一対五の比率になっている。これでは余りにも経費がかかりすぎると思われるだろうか。それならば、子どもの不適応に対処するためにはやさねばならない経費について考えてみるとよい。心

理治療、言語治療のための教師、家庭教師、補助教師、相談教師などの要求が高まりつつある現状をちょっと考えてみればよい。

さらにこうした人たちの日程を合わせるために費やさねばならない面倒について考えてみるとよい。

ある一年生担任の若い先生が、私にこんなことを語ってくれた。「私は、子どもに『助力を与える』ためのプログラムに合わせるために疲れはててしまいます。ときどき、私は自分の子どもたちはそっちのけにして、時間と補助教師のことばかり気にしているのに気づきます。何でもいいから、年に二十人子どもをくれ、そして教室の扉をしめてくれと叫びたくなるのです。そうしたら私はもっとたくさん良い仕事ができそうな気がします」おそらく、財政的にも人間的にも、もっとも経済的な方法がもっとも効果的な方法なのであろう。

時間と地域の協力について

数々の提案が、児童の滞園時間を長くすることについてなされている。そこで「ある特定の子どもについては、一日のどのくらいの時間学校で過ごすべきか」も考えてみる必要がある。しかしそれ以上に大切なことは、在園時間を延ばすことが子どもにどんな影響を与えるかを注意することである。子どもと教師との一对の関係があるということだけでなく、そのあり方が問題である。この問題は、すべての児童にとって重要なものであるが、人口の

大きな部分を占める恵まれない子どもにとっては、きわめて重大なことである。恵まれない子どもの学習不足の直接の原因是、子どもを勇気づけ、支え、そして豊かにするおとなたちとの個人的接触を欠いていることにある。

さて、私たちは次第に水平線上に浮び上がってくる問題をとり上げねばならない。学校と家庭との橋渡しをどのようにしてつけるか？ 子どもはまず第一に一次的家族集団の一員である。その子どものための機関としての社会福祉行政、保健所、教育機関、地域の諸機関などの方面的協力をいかにして実現するか。貧困地域のための補助プログラムはまさに、このような協力をすすめるためのものではないか？

幼児教育の潜在力

三歳ないし四歳児の教育が、最近強調されるのは、早くスタートをきればそれだけ早くある点まで到達するとか、教育のレールの上を一步先んじて歩むことができるという考えが根底にあるようである。しかしながらこのような論拠を実証するデーターはほとんどないのである。それなのになぜ多くの人たちが、幼児教育の年齢引き下げを強調してそれに希望を託すのであろうか。なぜ人々は、幼児期が子どもを教育するのに最もよい時期と考えるのだろうか。私は、幼児期が特に実り多い時代であると信じてい

る。それは、これから示す四つの理由が教育を進めていく上で大きな潜在力となると考えるからである。

心理・社会的基盤

第一に、幼児期は、人間がはじめて家族という特殊な枠の外の人々を知る基礎ができる時代である。他の人が自分や自分の要求をどれだけ受け入れてくれるかを学ぶ重要な時期である。子どもは、他の人たちと仲よくすることを学ぶ。拒否、受容、支配、服従、回避、先導、追従、妥協など、いろいろと試みながら、子どもは次第に他人の靴に自分の足を合わせたり、他人の経験を感情的に理解できるようになるのである。

幼稚園時代に、子どもは自信をもつこと、自制心を強めてしつけられること、他の子どもやおとなから価値ある人間として認められる学ぶ。それと同時に、失敗も経験する。自分を抑えられないために、他人より劣っていること、何か自分の家のやり

方が間違っているのではないかということ、幼稚園で話す言葉が理解できなかつたり、先生に家で話す方言をわかつてもらえないかつたりすること、いつでも関心をもたれ、注目される訳ではないことなどを学ぶのである。

私は、これが、あれかの二者択一的な自我意識のことをいって

いるのではない。単に両極端を示すことで、幼稚園時代の子どもの心理、社会的経験がいかに複雑であるかを知つていただければそれで十分である。幼児期に自分自身をどのようにみるかということが、小学校以降の生活にどのように深くまた広く作用しているかを考えると、学習の一貫性はどうしても必要にならなくてくる。学校は、子どもが自分の足で立つ機会を与えるべきではない。そしてまた、子どもの個人生活にとっても意味があり、社会的にも重要な出来事で成功することにより、喜びと励みが味わえる機会を豊富に与えるべきである。われわれの規格にはまつた考え方には立つプログラムではなくて、子どもが人生の要請に直面したときに、現実に力をもつようなプログラムこそ、今必要としているのである。

概念形成の基礎となる時期

第二に、幼児期は概念形成の基礎ができる時代である。ハントによれば、

初期経験は、情緒や性格の面よりも、知覚、認識、知能の機能面がより重要であるように思われる。

この年齢の子どもは囲りの事物に好奇心をもつていて、さわったり、にぎつたり、なめたり、知りたい一心に「なぜ、なぜ」とうるさく質問する。この知的成長の発端となる活動は、行動的な

ものであり、操作的なものであり、感覚的なものである。盛んに

材料や道具を使い、友だちと交流することによって開けた世界を概念的に把握するのである。

幼児は、どんな好奇心をもつただろうか。子どもは、人間と人間関係に特に強い関心をもっている。また、年齢について、あるいは結婚や親子関係について好奇心をもっている。このことは、

実習生の次の記録から知られる。

三歳児 女の人はどうしてお母さんになるのかしら？

四歳児 (実習生に向かって) お姉さんに子どもがいるの？

実習生 いいえ、いませんよ。アンディ。

四歳児 それではお姉さんは先生じゃないの？

実習生 いいえ、先生ですよ。

四歳児 それじゃ、先生なら誰でもお母さんじゃないのね。

三歳児 女の子は女の子と結婚しません。そうでしょう？

このように子どもははじめに決めた枠組に新しく覚えたことを当てはめて、それが必ずしも前の枠にびつたり当てはまらないことを発見するのである。子どもが不一致の経験をする時、教師はそれに合った枠組や正しい概念を系統的に与えてやれるのである。

幼児は、数を量の尺度で表わすことがある。ある三歳児は、実習生に向かってこんなことをいった。

お姉さんはこのクラスで一番年とった先生ね。だってお姉さん

の足、クラスで一番大きいんですもの。

また、ある五歳児は、数量を表現するのに次のようにいった。

ダビット ぱくたちいつお帰りなの？

実習生 もうすぐですよ。

ダビット 時間みせて。何時？

実習生 あと一時間よ。

ダビット (しばらく考えて) フゥーン解った、これからふたつのことすれば、お帰りの時間になるね。

四歳児のベヴァリーは、不服そうにして話をした。

ベヴァリー どうしてアンは私より大きいのかしら。アンはまだ三歳で私は四歳なのに。

先生 アンは背が高いけど、あなたの方が年は上なのよ。

ベヴァリー わかったわ。アンは私より背が高いけど、私の方が長く幼稚園にいたんだわ。

さまざま質問や、ひとりひとりの子どもの話に耳を傾けていくと、その年齢の子どもの概念地図が、いかにもムラだらけなのに気づくのである。三歳児のイヴアのわざか五分間の会話からこのことが知られる。

地下鉄は電車のおうちで、線路は電車の歩く道だよ。動物は、大きくなると人間になるんだね？（母親が彼を寝かせようとした時）電気のあかりが夜とまざってお昼になるんだ

ね？

どんなにすばらしい経験でも、たったひとつの経験では確かな概念を作るのに十分とはいえない。子どもは、概念がある程度定着するまでに、しばらくの間いろいろな角度からためしてみなければならない。ピアジェやブルーナやシャーリルドなどの研究でも、子どもは抽象的な構成力や推理力をもつためには、広い直接経験が必要であり、そこから抽象化や一般化ができるいくことを示している。幼児のプログラムは、いまやもと豊かなものにいろいろな種類の具体的で、操作的で感覚的な学習経験を与えるようにならなければならない。このようなプログラムができてこそ、子どもは関連のある資料を集め方を学び、またあやふやな概念をもつと正しいものに改めて不一致の部分をなくす方法を発展させることができるのである。以前のあいまいな経験を操作できる概念にうつしかえ、抽象化して概念を成長させるためには、学校内における一貫した学習の枠組の必要性を強調しなければならない。

言語習得の基礎となる時期

第三に、幼児期は、言語発達の基礎ができる時代である。ことばなしでも考えられるが、思考は言語に依存するところが大きい。概念はたいていことばで表現される。ことばは知識を蓄え、

発見し、問題を解く効果的手段である。また、ことばは、類似、

同一、差異によって、あるいは、時間、空間によって、原因・結果の相互関係などによつて資料を組織つけ、構成する道具である。

中流階層の子どもと、貧困階層の子どもとを比較するとき必ず言及されることは、その子どもたちが使うことばに大きな差があるという点である。しかし、貧困階層の子どもは、ことばをもない子どもだといきれるほどの資料は幸いにしてまだ出されていない。このような子どもでも、自分だけの遊びの世界では盛んにおしゃべりをするものである。彼らは、スペイン語やその他の外国語で話したり、標準英語とは大分違う英語で話しているのか知らないが、そのような子どもたちを指して、ことばを持たない子どもとはいえないと思う。この子どもたちは、自分がその場に適当でないと感じるときに、ことばを持たないようみえるのである。そして、教師中心の、統制された話し合いの場では、言語的反応をすることに抵抗するのである。

しかし、階層によつて言語表現に質的な差が見られるのは事実である。貧困階層の子どもは、語彙に乏しい。文章の長さ、複雑さにおいて、あるいは、発音の正確さ、音の弁別力において、より恵まれた子どもと比べて劣るようである。しかし、ことばで表現するという点では、それほど大きな差はない。五歳の女の子が「ヤイ！ よくもやつたな。お月さまに向うまでもなげとばしてや

るぞ」といったとしても、その感嘆文の力強さの点では劣るとはいえないであろう。

階層による子どもの言語発達の差を分析してみると、中流階層の子どもは、周囲が言語で満ちており、おとなと話をする機会にも恵まれていることが指摘される。一方、貧困家庭の子どもは、このような広範囲にわたる言語刺激に欠け、しかも彼らの話し相手は、言語能力という点では同じぐらい劣る近所の子どもたちであることが多いのである。このことの意味するところは大きい。教師は、子どもたちに、しっかりとした言語的基礎をつける仲介者としての仕事がたくさんある。教師は、子どもが関心をもつていることを一対一か小グループで聞いてやることが必要である。興味のある刺激の中に引きこむことによって、意味のある語彙を学ぶ機会を与える必要がある。あるいは、意識的に単語や同意語を子どもがあそびに取り入れたり、子どもが自分のやったことを報告する話し合いの時間に、そのことばを思い出させる機会を与えて、子どもが楽しんだ経験をテープに吹き込んでおいて、自分でそのテープが聞けるようにイヤホーンをいくつか用意してやることも先生の仕事である。子どもが、本当に語彙を増したかどうかは、あそびの時の子ども同士のやりとりの中にどれぐらい広がったかによって、ある程度測ることができる。

真空の中で人為的にことばを訓練してもこのような成果は得ら

れないだろう。それは一見、時間がかかるないですむように見える。しかし、それは教師をよろこばすことが主な目的とあいまつて（子どもによっては、こうした圧力にたやすく反応する子どもがある）新しい言語や話し方が、あそびの中で自分のものとなるて使われないのである。私たちは、読み書き中心の社会に生活してはいるものの、読書では話すことばのようにうまく意志の疎通ができないし、流暢に話せるようにもならない。その上、ことばは、概念形成や思考と深い関係をもつてるので、言語能力を育てるための一貫性のある教育を、ナースリースクールからはじめ幼稚園、小学校さらにそれ以上にわたって行なう必要があることは明らかであろう。

創造性のための基礎となる時期

第四に、幼児期は創造性の基礎ができる時代である。D・P・

トランスは「今までの研究や観察を総合してみると、幼児期の創造的なイマジネーションは、四歳から四歳半で最高潮に達し、子どもが学校へ上がる五歳頃に下降する。しかし、この五歳の下降現象は自然現象ではなく、人間（あるいは文化）が作ったものであると指摘できる」といつている。もし、これが事実なら私はそれは人間が作った現象ではなく、人間が作った悲劇であるといいたい。現代社会は、あらゆる創造性を必要としている。創造性

は、社会を腐敗と破壊から自らを守り育てていくものであるが、

私たちには幼児の創造性の若芽を育てることができないでいる。

幼児の創造性に関する解釈の違いはあるにしても、幼児が材料やあるいは思考を自由に表現したり、思いのままに操作するようすは、おとなが創造性について一番複雑で熟練した技術を要すると考える即興的で自由自在に振舞える活動と、一脈通じてふるいとっても異論はないだろう。子どものあそびは、子どものうつてたえずくりかえされる創造活動であり、創造経験の源泉である。

あそびを通して子どもは、自分自身や自分の考えをためすのであり、物事の関係や真理を発見する。そしてあそびによって自分自身を訓練するのみならず、あそびによって創造的過程を維持するのである。

幼児は、学校生活をつづけていく内に、すばらしい創造的活動は報いられないばかりか、教師や仲間からもよく思われない」とこに気づくようになる。ケツウェルとジャクソンは、教師は創造的な生徒よりも、IQの高い生徒を好むと報告している。しかし、

私たちには子どもの創造性を伸ばしたいのなら、創造性を高く評価すべきである。それには、私たちは、独創的で自分で選択できる仕事の機会を多く盛ったカリキュラムを作らなければならぬ。また、本当の問題解決の場面や学習法として発見した技法をためしてみる機会も多くの必要である。私たちは、本当に創造性を高く

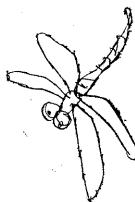
評価するなら、子どもに支援的であり心理的にも安全な教室の雰囲気が、学校生活を通じて一貫して必要である」と理解するであろう。創造的精神は、あまりにもきやしやで過敏なために五歳か六歳か七歳でたち切られてしまい、九歳か十歳か、二十歳にかけて外からの要求によって再び出でてくるようである。学習の一貫性の考えは、創造性の育成のためにも欠くことのできないものである。

幼児期は、人間生活を通して自己の概念や知的な概念ができるる時代であり、話すことばや創造性の基礎ができるる時代である。故に、教育やそれに関連ある領域の思慮深い人々が、幼児教育は子どもの教育経験を発展させるための魅力的な特色のある分野としで非常な関心をよせるのも不思議ないとではないのである。もちろん幼児期は、多面的な人生の中の連続的な成長のひとつの部分なのであるが。

文献

1. J. McV. Hunt, "The Psychological Basis for Using Pre-School Enrichment as an Antidote for Cultural Deprivation," *Merrill Palmer Quarterly*, July 1964, Vol. 10, #3.
2. E. Paul Torrance, "Adventuring in Creativity", *Childhood Education*, Oct. 1963, p. 83.
3. Elliot W. Eisner, "Research in Creativity: Some Findings and Conceptions", *Childhood Education*, April 1963, p. 373.

なぜあせるのか



アニー・L・バトラー

(アニー・L・バトラーはブローミントン、インディアナ大学幼児教育学助教授である。)

四・五歳児に形式化された教育法の必要を感じているのは誰なのである。両親か、教師か、それとも子どもたち自身なのか。幼児の成長発達の基本型は変わったのであろうか。ゆきとどいた教育をなし得る児童数と設備教材がととのった、機能的な教室をそなえる責任をとるのは誰なのか。学校カリキュラムの各分野に、十分貢献し得るだけの資格ある教師をととのえるべく奔走するるのは誰なのか。教育専門家か、それとも一般市民か。

ほとんどといってよいほど、「スピード」がいかに現代生活の中で重んじられているかということに気がつかせられる。わが科学者たちは、宇宙飛行の成功をそのまま人類の月世界征服への里程碑と考えている。国をあげてわれわれは、この宇宙開発の成果とライバルであるソ連と比較し、一步も劣るまじとがむしゃらである。翻つて家庭生活を見るに、家庭もまたこの慌しさのとりことなっている。すなわち、父親は毎朝仕事に急ぎ、母親は子どもたちをせかして学校へ送り出し、そして自分も仕事へととび出すのである。

今日、新聞やテレビにとりあげられるニュースを見ると、その

父親の誇り高き母校に入学するために、級友としのぎをかける高校生は、いうに及ばず、中学校、小学校を通じて現代の子どもたちには、より速く学習すべく期待がかけられている。幼稚園の教師もこんなつぶやきを聞くと、あせりを感じずにはいられない」「何でこんなに遊んでばかり。時間がもったいないじゃないの」

「この子はとても頭がいいんですよ。もうそろそろ机の前にすわってちゃんと勉強をはじめてもいいのに」

多くの人々は、より形式化した教育方法や小学校教育内容を幼稚園教育の中に移行し、かつてに四、五歳児の教育構想を打ち立てるのである。その結果幼稚園の教師は心ならずも、子どもたちがもつてている知識や思考の芽を伸ばす機会や、生まれながらにして持つ学習の喜びを自分で感じる機会を奪い、代りにすべての子どもに等しく教える既製のレディネス養成の教材を与えることになる。

—さまざまな経験から学習する—

子どもの学習に対するわれわれの関心事は変わった。まつたく、幼児はわれわれおとなを驚嘆させる。宇宙船打ち上げのたびに湧く興奮や飛行状況をおとなにまじって一人前に感知しながら

ら、達者な口調で軌道の衛星や宇宙飛行士のことをしゃべりまくる。隣りの町のことより、ケープカナベラルのことの方をよく知っているあります。

現代の五歳児は、われわれがずっと後の年齢で苦心しながら学んだような科学的概念を、もういくつか理解しているように見受けられる。そう、少なくとも用語の使い方は正確だ。今や宇宙一でんぱりの時代に生を受け、彼らのことばは宇宙時代語とでもいえようか。ひと頃前の幼稚園では、子どもは防空壕をつくり爆弾を落とし、おまけにおとなたちが名前も知らぬ飛行機の型をいじることができたものであった。当時の教師や両親は、この攻撃的な行動や敵意の表現に関心を集め、幼児の感情生活がこれによつて永久に破壊されてしまうのではないかと案じたものである。しかし知的能力は当然のものとしてうけいれ、心配もしなかつた。

今日われわれは、当時とはまた異なった時代の波に迫られている。幼児の行動に対しても、これまであまり問題にされなかつた面に目をとめ、評価検討するようになつた。今日の五歳児は過去の五歳児に較べ、たしかにある物事については速く学習し得るようになつた。

しかしながら、成長発達の基本的パターンはほとんど変化していない。子どもたちは、さまざまな異なる経験を通して学習し

得るのである。

子どもたちの学習方法を形式化し、学習の機会を制限することがよりよい教育だと考へるならばそれは、個人的な好みと、実質的な教育とを区別する能力に欠けているためと考えねばならないであろう。われわれのはすべきことは、子どもの経験領域を縮狭して学習の機会を阻むのではなく、子どもの学習可能の場をできる限り広めることに外ならないのである。

—教育の早期形式化は誤まつてゐる—

近来世界制覇の競争にともなつて科学、数学、外国语に強調点がおかれようになつたが、これがかつてなかつたほどおとなたちに、自分自身の教育の不十分さを意識させるに至つた。この意識はやがておとなたちを「これから子どもに同じ失敗をさせてはならない」との強い決意へと追い込んだのである。子どもが少しでも早くよい職につき、立派な地位を得、十分な経済力で現代科学の粋を集めた新製品を片づぱしから手に入れるためには、どうしても学業を早くはじめなければならない——口でこそいわぬが、おとなたちの間にはこんな感情が流れているのだ。教育の早期形式化は、より大きな能率と理解をともなう、理想的な学習効果を保証するものという、誤った解釈がなされたしまつたのも

ある。

こんな状態のもとにつけては、一体なぜ子どもが幼稚園期に商業の基礎的教科を教えてもらえないかとたずねるのも無理はない。そうすれば子どもは、この膨大な知識体系を少しでも早く身につけはじめることができるではないかというわけである。一方子どもの側に立てば、誰が一体こんなものを必要だと思つていいのかとの質問が出てくるのも自然である。両親か、教師か、それとも子どもなのか。

大多数のこたえは「こうである——子どもは好むと好まざるとにかかわらず、こうした勉強はいずれしなければならないではないか。ほとんどの五歳児は無限の知識欲を示すものであるが、形式化された学習への興味はまだほんのわずかにすぎない。われわれは子どもに基礎教科修得のことをとやかくいわなくとも、いくらでも彼らの知識を発展させる方法は考えられるはずである。子どもがその期に到達していない前から技術を覚えろとせき立てても、それは子どもが自分のペースで十分な成長をする権利を剥奪するのも当然である。これが子どもの学習に対する自己概念と態度の形成にどんな大きな影響を与えるかということは、厳密に考察されても然るべきである。

われわれはともすると、究極のところ何を学び取るかを決めるのは子ども自身であることを忘れてはいる。子どもが学び取つたも

のは、われわれが教えたと思つてゐるものと、全く異なつたものであるかもしないのである。もし教室に重苦しい圧迫感が充満していれば、たゞ教師がどんな立派な教育目的を持つていても、

それは価値がなくなつてしまふ。子どもたちは、十把一からげの型にはまつた学習を強制され、恐れや不信、また圧迫感を覚えるであろう。子どもの学習成績は、家庭や学校に広がる不安の間接的な結果であるかもしれない。

教材をやり終えることによくせくして、物事の（ある子どもに）つては未知の、またある子どもにとっては既知であるかもしれない探究過程に経験する喜び、スリル、そして達成感は失なわれてしまうであろう。われわれは、四、五歳児が終局的に学び取るものを見ることはとてもできないのである。われわれにできるのは、彼らの学習意欲を盛り上げ、思考力がさまざまな方向に発達するように助長し、学習目的達成を促進し、そして、彼らが学習途上避け難い失望に直面する時には支えの手をさしのべてやることである。子どもが、学習活動に拍車をかけることができるために、先ず彼自身学習に取り組む意欲を感じなければならぬ。われわれが幼稚園で早く教えよう、教えようとすれば、それは子どもの自発的な「やろう」とする気持をおびやかすことになる。それなのに、なぜそんなにあせるのか。

—子どもは独自のペースで学習する—

この「急げ、さもなくばとり残されるぞ」とでもいたげな現代家族の足なみは、幼児（三歳～六歳）の自然なテンポとはおよそかけはなれたものである。子どもが自分で雪ゴートを着るのを待つ時間などともないから、誰かが着せてしまう。昼食のしたくができれば、前ぶれもなく子どもの遊びは中断される。めずらしいショーウィンドウに目をとめる暇もなく、子どもは行きたくもない所へ行くために文字通りおとなにひきずられて行く。

良い幼稚園の特質のひとつは、子どもがさまざまな活動や学習を自分のベースに合わせて行なうことができるところにある。例えばアレは、一冊の本を十五分かけて、挿絵のこまかい部分にまでひとつひとつ気を配りながら見る。一方ジムはこの同じ十五分間に、本をばらばらとめくつて見終わると、積木の汽車に乗り、次に絵をかくという移動ぶりである。やがてジムは「お土時」に間に合うよう手を洗うために遊びを中断するのだが、それでもまだ彼には、石けんいじりをしたり、鏡の前でしかめつらをして見たりする時間が計算に入れられてなければならない。おそらく彼は手をふくのもどかしく、ぬれ手にペーパータオルを持ったままおやつのテーブルへ直行し、ペーパータオルを捨てて

脣かごに逆もどりするという事態も起るであろう。

この二人の子どもは、その時には同じでなくとも、結局は読み、書き、算数を修得するようになるであろう。実に彼らは、異なった道順を経て学習するのである。この道順は、外見的には能率的に思えず、学習成果も明確でないかもしれない。それにもかかわらず、レディネス養成のための形成化された教材をやらされた子どもは、読みの学習に直面する時、教材による形式化された準備活動のなかった子どもと比較して、すぐれていないのである。(注1)

学習には長い時間がかかるものである。形式化された学習に集中することができるようになる前に、子どもは先ず成長するための時間を必要とする。また、いろいろな材料を使う方法を覚え、人々と親しく交わり、新しい経験を心ゆくまで味わうのに、時間を必要としている。

—子どもを広い視野から理解しよう—

幼稚園教師の視野を広げるための一つは子どもひとりひとりをじっと見つめて、その個性の差があるがままに認めることである。すべての五歳児がおたがい共通のニードを持ちながら、各自を他の五歳児から歴然ときわ立たせるものがある。

いく人かの五歳児は字が読めるだろう。他の五歳児は積木で非常に手の込んだ美しい建物をつくることができる。ある子どもは尽きることない想像力で劇遊びを盛り立てるのだ。その子どもは、先生にたびたび本を読んでいたのむ。後で彼の遊びや質問に注意すると、いかに彼が既得の知識のうえに、新しく得た知識をこなして行こうと努力しているかがわかるのである。

字が読める子どもは幼稚園ではむしろ本を読もうとせず、もつと社会的な、創造的な活動を選ぶこともある。その方が新しい、また、別の種類の経験を与えてくれるからだ。子どもは数多くの才能を持っている。(注2)もし、これらの才能が早く発見されれるなら、子どもの抽象的学習や課題達成へどれだけはげましになり、役に立つか知れない。子どもの中に、すでに明らかな興味や才能があればそれをのばし、能力の目立たぬ子どもには、成長発達を促す分野を広めてやり、緊張が取り除かれて、のびのびと創造的活動が行なわれるようなんふんいきを作りだす—これらのことができる幼稚園の教師は、まことに羨むべき立場にあるといわれてよいであろう。

幼稚園教育形式化への圧力を、各地区の学校設立計画にたずさわる教育専門家や一般市民の責任という観点から検討すると、異なる性質の問題が出てくる。行きとどいた教育をなし得る生徒と設備教材がある—こんな機能的な教室をととのえるのは誰の

責任なのか。学校カリキュラムの各分野に、十分貢献できるだけの資格ある教師をととのえるのは誰の責任なのか。各々のクラスに、また学校に適したプログラムを立てるのは誰なのか。もしわれわれが、各自の責任をしっかりと見きわめ、遂行して行くならば、幼稚園教育形式化への圧力をひき起こしているこの「あせり」は、やがて、より良い教育実現への「急ぎ」に変わつて行く「ちがい」ないのである。

1. W. Paul Blakley and Erma M. Shadley, "A Study of Two Readiness-for-Reading Programs in Kindergarten", Elementary English, #38, November 1961, pp. 502-505.
2. See ACET's All Children Have Gifts.

質問の余地もなく、各ナースリースクールや児童福祉施設のふんいきのいかんは、教職員、殊に園長の資質によるといえる。園長その人こそ、子どもたちが生活し、呼吸し、その存在を得るべきふんいき作りをするのである。

この「手で触ることのできないふんいき」がいかに子どもたちに影響しているかを測定する手がかりを「披露」しよう。よく子どもたちを観察してごらんなさい。

彼らは各自の活動に夢中になつて没頭しているか。

彼らは人間らしく行動しているか、それとも命令を待つ操り人形のようか。

彼らの表情は豊かでいきいきしているか、それとも退屈そうで氣力がないか。

部屋は健康な活動や会話がかもし出す音でいきづいているか、あるいはピンが落ちても響くほどの静けさが要請されているか。子どもからの質問にはちゃんと耳が傾けられ、誠意をもつて答えられているか。

子どもたちはきげんよく楽しそうにしているか。

彼らは個性を持つ人間として評価されているか、あるいはただ自動人形としてしか見られていないか。

彼らはいろいろなものを試し、誤りをし、自分自身の判断を精いっぱい働かせる機会が与えられているか、また彼らの技術や自制力を発達させる機会はどうか。

彼らの独立心は助長されているか。

彼らは個性を自由に表現することが許されているか、それとも常に先生が示すただひとつ的方法しか正しいとされていないか。

心も身体も感情ものびのびと羽をひろげているか。それとも便宜的な一せい教育のわくの中にきちんとお行儀よく閉じこめられているか。——コーネリア・ゴールドスミス

(子供の教育、一九六四年三月、三四四頁)

(東洋英和女学院短期大学・芝 恭子訳)

箱車の決定版！

キンダーワゴン

かわいい遊びの発明家たちは

このキンダーワゴンを

なにに仕立ててくれるでしょうか？

定価 5,500円



新発売

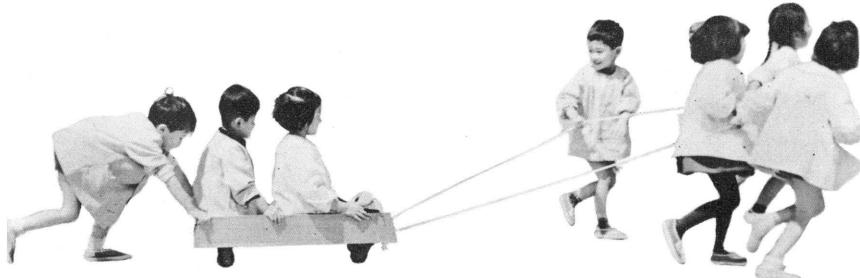
株式会社 フレーベル館

キンダーワゴン

箱車は幼児が興味を持って遊ぶ遊具です。人をのせたり、自分が乗ったり、物を運んだりします。また或る時は、消防自動車や列車にしたてて遊んだり、乗物ごっこなどの組織的な活動に利用したりなど……、箱車はいろいろな経験が総合的に得られるたいせつな教具です。ですから幼稚園教育要領にも「ポール、綱、箱車などを使って遊ぶ」と箱車の名前がでているわけです。箱車は押す引くという運動能力を養うに最も適しています。また動きだすと加速度がつき巧みな身のこなしが要求されるので巧緻性が養われます。押す人と引く人との協力がなければうまく動きませんし、子どもは物をのせて引きたいので、あとかたづけや作業も興味をもってやるようになります。なお車は人間生活において大きな役割を果たしています。ですから箱車で遊ぶ時に、人間生活と科学技術との関係を、幼児なりに漠然と感じることの重要さを見落としてはなりません。

キンダーワゴンは、このようなことを考え、幼稚園や保育所という教育の場において最も適するように、その規格や機能を研究して作られた教具です。

(推選のことば) 千葉大学付属幼稚園園長 宮内 孝



- 10人位でも遊べます。
- ワゴンの中に2人乗ってもゆったりしています。
- 重心が安定しています。
- 回転が自由にできます。
- ワゴンの素朴な持ち味は子供たちの遊びの幅を広げます。
- ロープは



図のようでき、その長さは遊ぶのに無理がありません。

規格 たて86cm よこ40cm 高さ23cm 箱の深さ11.5cm ナイロンロープ360cm

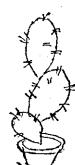
<運動具研究会推選> 遠山喜一郎・加藤孝吾・田中次雄・玉越三朗・村田修子・青木きみ・斎藤敏夫・宮内孝の各先生 (イロハ順)

創業60年

発売・株式会社 フレーベル館

幼稚園はたいせつである

マネット・スウエト



ゲインズヴィルの、フロリダ大学、P・K・ヤング実験学校の幼稚園児は、両親に評価報告をしている。筆者は、「子供の教育」誌の編集委員であり、幼稚園の現職教師である。

私は三千人のグループの子どもたちに向かっていった。

「あした、来年入園してくることになっている何人かのお友だちが幼稚園に来ます。

ゲインズヴィルのどの学校にも幼稚園があるので、私たちはしあわせですね。

他のまちでは、幼稚園に行くことのできない幾人かの子どもたちがいます。

また、幼稚園はそんなにたいせつでないと思っている人たちもいるそうです。

私は、あなたたちがこの質問に対してもうよく答えることができます。なぜなら、あなたたちは幼稚園に一

年間来ていたのですから。

この質問について考えてみて下さい。幼稚園はたいせつでしょうか。もしそうなら、どうしてでしょうか？

次の答えは、これ以上の質問をしないで、ひとりひとりの子どもたちによって得られたものである。

幼稚園へ行くと、いろいろなことを教えてもらえます。私は、

幼稚園に行くと、一年生になつても困らないと思ひます。

ハイ！　本のおはなしや、読み方、書き方、かぞえ方などについて教えてもらいました。また大昔に、ほら穴に住んでいた人たちがどのようにして自分たちの羊を数えたかななどについてならない

ました。

私たちは、小川であそんだり、よじ登るときに注意することについて教えてもらいました。また体育館でバスケットボールや、そのほかたくさんのがゲームなども教えてもらいました。

幼稚園はとてもたいせつなところです。私たちは消防署へ行って、ごほんの時でも警報器がなつたら、サッと棒をすべりおりるのを見る事ができるからです。私たちは、本でいろいろな種類の消防車について「よみました」

消防夫さんたちが、本当に火を消すしごとをしているところを映画でみました。ホースのことを「スバゲティ」と呼んでいると いうおもしろいこともきました。私たちは、スマーキーベアで火事の規則をならい、どんなものが燃えやすいか、どんなものが燃えにくいかなどを教えてもらいました。

私たちは、どのようにするか、どんなことをしなければいけないか、また自分のことは自分ですることについてならいました。幼稚園は行つたほうがいいと思います。なぜって、私たちはとても大きいつみきの家をつくつて「グッダー」という遊びもしましたから。

私たちは、いろいろな家をつくりました。また本を借りたときは、大切にしなければいけないこと、約束の時間に返すことなどを

らいました。また私たちは、上手に登るにはどうしたらよいかなど、たいせつなことをたくさん教えてもらいました。

ばくは、かなづちを使うことが上手になつたよ。船や飛行機やスクーターをつくつて、色もぬつたんだよ。

幼稚園はやつぱりたいせつだと思ひます。たくさんの新しい詩やお話や言葉を教えてもらえるからです。また考えることや、することをならいます。

幼稚園だったら、自分でレコードをかけることができるし、ピアノだって弾けるんです。ピアノとオートハープに合わせて歌つてみるのもとても楽しいわよ。

私は、イーゼルの上に線をひいたり、糊ではつたり、色をぬつたりすることが好きです。ソープペインティングや、粘土あそびもおもしろいです。

私は、わりあい上手に数えられるようになつたのよ。

私は砂や紙や糸巻や木などで、いろいろなものを作りました。

幼稚園はたいせつだと思います。なぜなら、かたづけることを教えてもらえるからです。自分ひとりでかたづけるよりも、みんなで助け合つてするとずっと早くできます。先生も私たちといっしょにして下さいます。

私たちは、幼稚園で誕生会をいたします。そして大切なことをするときには、委員会で話し合います。

ハイ！私たちの委員会は、大事なことをたくさん考えてしました。

私たち、パーティに来てくれるお母さんやお父さんやおばあさんたちのために、クリスマスケーキや、ジュースをつくりました。また飾りつけも全部しました。

それだけじゃなくて、私はバナナパンや、ゼリー、フリーザーをまわして、あのおいしいイチゴ・アイスクリームも作つたよ。またしましょう。

私は、お手伝いのしかたを教えてもらいました。

私は、みんなが幼稚園にもつて来たものについて、いろいろ教えてもらいました。

私は、お友だちがたくさんいるんです。はじめの日、私の知っているのはアンだけだったんですよ。みてごらんなさい。今だったらこんなにたくさんのお友だちがいるのです。

私は、英語を話すことのできないサンジブともお友だちになることができました。私は、サンジブがたくさんの言葉を覚えるお手伝いをしました。

そして私は、サンジブが住んでいたインドのことについて話をききました。サンジブのお母さんが着ていた美しいきものがサリーだと、うごきもきました。

私たちのところへ来た女の子と女子大の先生から日本のこと

いろいろききました。ABCを使わないで私の名前が書けたのでびっくりしました。

私は、私たちのクローバーうさぎについて世話をすることをなしました。お母さんうさぎが子うさぎのために、あたたかい巣を作つてやることも教えてもらいました。私は、小さいクローバーにスポットで餌をやつたけれど死んでしまいました。それで私は悲しい思いをしました。

私は、たくさんゲームをしてあそびました。ゲーム遊びをするときには、いろいろな約束を守らなければいけないということも教えてもらいました。

ぼくたちは兵隊さんのことや汽車のことでも教えてもらつたよ。私は、ジュースをのんだり、マットの上でお休みしたりしたのよ。からだが丈夫になるんだって。

私は、こんなにたくさんのことならつたよ。数字や、レコードや、歌や、科学や、うみがめや、小鳥など、それからお友だちと仲よくあそぶこともよ。

私は、たくさんのこと書けるようになつたし、新しい言葉もわかるようになつたわ。

ぼくは図書館へ行くのが大好き。どんな本でも自分でとつてみることができるんだから。

ぼくはレゴでいろんなものを作つてあそんだよ。ぼくはお父さ

んのようにな建築士になりたいな。それとも絵を描く人になろうかな。
もしかしたら両方になるかもわからない。

うね」

私が教えてもらった中で一番むずかしいと思つたことは、くつ下やくつのはき方です。ひもを結ぶのは今でもむずかしいですね。幼稚園はよいところです。私が家で遊びたいと思つたおもちゃを借りることができるのはうちは書いて借りていけれど、今は書かなくとも借りることができます。

私はものを大切にしたり、動物や人々のお世話をすることをな

らいました。

ぼくは安全ということが解つたから気をつけたいと思います。

「今ここで、みんなで話したことは大切なことなんですよ。でも、まだ他にも大切なことがあります。

もし幼稚園に行けなかったら、一日中テレビを見てつかれてしまつたりしたら、外に出られなくなってしまいますね。そうしたら、お天気のよい日の気持のいいことなどわからないでしょ

メリーランド州立大学のジェームス・ハイムは、国際幼年教育協会での講演の中で、よい幼稚園のカリキュラムは、大学のカリキュラムと同じ幅広いものであるといっている。

フロリダ州立大学の学校案内をみてみると、建築学、芸術、生物学、市政学、地理学、歴史学、衛生、人文科学、語学、文学、法学、論理学、数学、音楽、体育、その他のコースがある。これらの分野のすべては、ここにあげた子どもたちの報告の中に示されている。

これらの子どもたちは、幼稚園におけるこの一年間をよいものだつたと感じている。彼らは安心して一年生に進級するであろう。なぜなら、学ぶということはおもしろく、また、たいせつであることを知つてゐるからである。

（大阪キリスト教短期大学・大橋折恵子訳）

レディネスとは

エソルイーズ・カーペンター

レディネスは、紙と鉛筆の用具によって教え、訓練することができるものであろうか。

レディネスは、似ていない兎を消すような能力によって測定することのできるものであるか。オハイオ州、ケント州立大学、幼児教育学助教授、エソルイーズ・カーベンターは、それを否定し、いくつかの明瞭な理由を挙げている。

何かに対するレディネスは、いま直行しつつあることがらである。レディネスは多くの因子からなり、多くの方法で測定されなくてはならない。それは外から教えることのできるものではない。それは箱にいれて買うこともできないし、テスト用紙によって発達されることもできない。レディネスは量産によって作られるのではない、個人の状態である。それはまさに生活の一部である。レディネスの状態は、多くの方法でその特徴をあらわす。時には、外にあらわれた現象は單なる表面的なレディネスにすぎないこともある。何かいきいきしたものが内面から輝き出なければならない。態度、様子、顔の表情や期待は、子どもが現在の状態を内面的に受け入れて、来るべきものに直面する用意があるかどうかを示すよき徵候である。それはいかなる年齢の子どもであっても、共に働く熟練した教師にとつては認め得るような種類の事柄である。それはテストでは知ることのできない認知なのである。

成熟の過程

子どもたちは常にことなつたレディネスの状態にある。彼らは

多くの人々が、レディネスは一年生になる前の春に子どもたちにできねばならないものと考えている。このようなレディネスはシンボルをふくんだ特殊な組みによつて可能となると考えられている。幼稚園を訪れた人は「いつ、どのようにしてあなたはレディネスをやつているのですか」とたずねる。読むということはそのためのレディネスが機械的にひとつずつ行なわれなくてはな

食事によばれてもぐずぐずする。あるいは彼らは歩くようにならぬ。それともすぐに床にすわってしまう。準備が整つていているということを示しているものもあれば、まだ準備ができていないということを示しているものもある。レディネスの状態は、次に行くことを練習することによって生じてくるものではなくて、関係のある経験の連続によつて養われた成熟の過程によつて生ずるものである。子どもは、歩くことによつて歩行のためのレディネスができるのではないか。あらゆる要素が完全に統合的に働くようになつたとき、子どもは歩きはじめ、長期間を要してこの技術を完成していくのである。

らないような、そんなに組織化された過程であろうか。幼稚園の子どもたちが学校の読書と、楽しみのための読書と二つの種類の読書があると思っているのは不思議ではない。多くの地域で、読むためのレディネスを教えることを宣伝している夏期幼稚園はあるのだ！

いま、必要とされる能力

ナースリースクールや幼稚園は、子どもがいま必要としているもののために備えられている。そしてどんな経験でも後の経験の基礎となっているよう、それは一年生のために役に立つであろう。レディネスは、環境や人間や事物に熟練することから生じてくるものである。それはあたりまえのもの越え、利己心を越えたいという願望を促し、身体の成熟、社会的能力、感情の統制や知的機敏さに達しようとする願望を促進するものである。読み方のレディネスは他のことと同じように、長い期間にわたるこのような経験によって培われる。ナースリースクールや幼稚園で、子どもは他人のいうことに耳を傾け、順番を待ち、批判的に思考し、責任を負うことを教えられている。子どもは、いま彼の属しているグループのメンバーとして貢献するためにこのような能力を必要としているのである。彼は、「一年生の先生が期待しているから」このようなやり方でふるまうように教えられているのではない。

就学前のグループ生活は、自己を満足に展開させ、現在と将来のためのレディネスを作りあげていくことを可能にするものである。それは探索的な環境であって過熱した準備の環境ではない。

多くの学校において、読むことは、ほかのすべてのことは附随的に取扱われるほど重大な事柄となつていて。読み方は、たいくつな経験の表からはじまる。それは同様に単調かつ制限された経験から生まれたものである。子どもたちはそれにもかかわらず熱心であるが、しばしばおびえており、親は自分の子どもがどのグループにいられるかを心配し、その上、しつけの問題がたえず起きてきて、誰もが読むことがもっとスマーズに行なわれるために、子どもたちにどのようにすればもっとよく準備させることができたのだろうかと疑問に思っている。その結果幼稚園や教育行政に目が向けられ、またある人々は幼稚園で「あまりに遊びすぎる」ことに問題があると思う。もし子どもたちが遊びまわっていては学習はできない。学習し勉強するためには、すわって紙に何か書き静かにしていなくてはならないのである！ しばしば「解決」として幼稚園にレディネスの教材を購入することとなる。

レディネスの教材は簡単に注文でき、それは紙でありすべての子どもを同じように教えていく。読み方は、「ここでは各種の段階をひとつずつ切りはなし、その段階で作用し得るような冷たい過程としてみられている。それは左から右へ目を動かす学習のため

の印刷された紙と図表なのである（それらの多くはレディネ斯特にもとづいたものではあるが）。しかし子どもは右から左へ、上から下へと楽しく生活をみつめる。子どもは自分の環境をよみとるためにもっともよい方法であるのである。子どもたちは、一列に並んでいるものの中からいちばん大きな木を選び出すことは骨を折るが、皿にあるいちばん大きな菓子をみつけるのはむずかしいことではない。

プログラムは購入できるか

訓練を受けていない教師を雇った幼稚園では、不幸なことに市販のプログラムを購入することによって、レディネスの問題が解決できると思つてゐる。用具を評価するための資格をほとんど持たない人たちの手にわたると、しばしば其の使用方法を知らなかつたりしてその結果、用具は彼らの手でこわされるか、或いは、子どもたちに与えられ、子どもたちは退屈のため無気力となり、それを拒絶することもなくなってしまうほどうんざりする。それに抗議する熱心な声は、「このような用具をしばしば強要せられた、よく訓練された創造的な教師から起つてゐる。これはレディネスのための用具への抗議のみならず、児童発達の分野において得られたすべてのものを無視することへの抗議である。

就学前数年間、子どもたちは多くの材料や多くの変化にとんだ考え方をもつて活動している。彼らは自分たちの環境を操作するこ

とを学び、自分自身や他人の価値を感じとることを学ぶのである。彼らは話をし、自由に動き、感じ、聴き、見ることによつて疑問に答えることを知つていくのである。彼らは書物がすばらしい知識と楽しみの源であることを学ぶ。彼らはいろいろの考え方によりくみ、そしてお互に相違していることを認めて、そのことは多くの道があることを学ぶ。彼らは新鮮な発見をし、そして愉快な、はなやかな、想像的なかつすぐれる描寫的な言葉を使用する。彼らは必要と感じたとき數え分類する。彼ら自身によつて書かれたシンボルは、彼らには通用するがおとなにとっては理解できない。彼らは記号である文字を一定のものに組み合わせると、何かを意味するものであることに気がつくが、しかしこの段階では、これがコミュニケーションの方法であるということを知るだけで十分である。幼稚園の空氣の中での数年間にわたる生活は、探究性の発達が行なわれるための幅広い経験と機会の時である。退屈している状態は、たしかに読み方のレディネスを示しているのではなくて、むしろ沈滯したプログラムを示すものである。よいプログラムにおいては、子どもたちが後に読むことを意味あるものとする技能そのものを発達させるのである。このような技能は、時計の時間のようにこまぎれにされた学習の片々に分離されるのではなくて、活動的に参加する環境から生ずるのであ

る。

教師がレディネスとは紙と鉛筆の技術によって教えられ訓練され得ると考えているならば、子どもは公然と反逆して当然であろうし、また、多くの子どもたちは反逆している。他のうさぎと異つたうさぎを消し、左側のネズミを右側の穴に入れるというような能力によって、次の楽しい生活へと移って行くレディネスが評価されている子どもに対して専門家として涙せずにいられない。

準備のための時間は短いが、到達するための時間は長い。レディネスは欲することと、ねばならぬこととの間のどこかにあるものである。それは成長、人格、想像、自己実現の実質的内容である。レディネスにとり組もう。時にはそれをとり出し、調べ、ためしてみよう。しかし目的もなくそれをふりまわすことはやめよう。たしかに今日の子どもは、前進的なよりよい資格をそなえた教師から、よりよき何物のかを与えられるべきなのである。

（大阪キリスト教短期大学・大橋祈恵子訳）

55

56

「」遊びは、子どもにとって「自然な」ものである。実際、この二つのものは、同じことであると思う。それは児童のあたりまでの活動である。——下準備もせず、何かの経験を（事実であろうが、空想であろうが）自発的に再現し、その中で子どもは猫になつたり、汽車、お母さん、赤ちゃん、消防夫、宇宙人、イン

ディアンなどになって、声をまねたり、それらしい行動をしたりする。ふつう、それは子どものよく知っている人やものと密接に関係しており、子どもは、ある時間——二分間とか、三時間、一週間——その人になるのである。このような行動は、家庭のおとなたちにはくだらないものとみえるかもしれないし、カリキュラムが、その日にトムがなりたいと思っていて小馬と合わないときには、教師にとってはじやまなものであるかもしれない。しかし、多くの重要なこと社会的発達、情緒的発達、興味、知識的背景や概念など——が、そこで学習されている。

ほんとうのごっこ遊びは、創造的であり、独創であり、即座的である。この遊びによって、子どもは感情や、願望や、理解をことばや行動で表現する。このような再現により、子どもは、この世界に対する安定と信頼を学ぶのである。ときには、遊びは事実に対する子どもの誤解や混乱を示す。ときには、遊びは身体的エネルギー、感情的緊張の建設的な解消に役立つ。ときには、このような解消が子どもの心の中に反社会的で有害な観念を立てたりしないまでも、刺激過剰になつたり、身体的危険を招いたりして、解消するのがよいかどうか、疑問になる場合もある。このような疑惑が生じるときには、理解あるおとなとの指導が必要とするときなのである。——エステル・B・スタークス「ごっこ遊び」子供の教育、一九六〇年十二月号、一六三一一六四頁

（T）

幼年期の言語



ジヨーゼフ・チャーチ

(ニューヨーク、ボーキープシーの
ヴァッサーカレッジ、児童学科教授)

子どもはどのようにして言語を学ぶか。

言語学習とは何か。

言語学習はどのような影響をもつか。

(3) 言語を学ぶことによって、子どもにはどのような相違ができるか。

言語を学ぶこと

子どもの言語を研究するには、言語学、哲学、社会学、人類学、発生学、動物の行動と発達、精神病学、および、知覚、思考、学習、人格形式の心理学など多くの分野が関係するので、それは研究の困難な分野と考えられている。そこでここに掲げた題目で論ずるのに、私は次の三つの問題にしばりたいと思う。

(1) 子どもはどのようにして言語を学ぶか。

(2) 子どもが言語を学ぶときに、彼が学んでいるということはどういうことであるか。

条件づけの過程として、容易に説明できる。すなわち、単語と物とが時間的に同時に与えられ、単語(あるいは語の集まり)が、物を代表する記号となる。それに対して、話すことは、容易に説明

できない。もちろん、子どもが話すことばは、彼が聞いていることばの模倣であることを私どもは知っている。

しかしながら、話すことを、単純な模倣理論で説明するのには、いくつかの難点がある。第一には、われわれの知識は、まだ模倣過程を十分に説明することはできないし、外的刺激がどのようにして刺激を産出する神経筋肉的過程に変換されるのかについてわかつていない。第二に、乳児の模倣は選択的である。すなわち、明らかに乳児にとって有意味なもののみが模倣されている。

第三に、刺激が与えられて、過ぎ去ってしまってから、数時間あらは数週間を経て、はじめて模倣が生じる場合がある。

さらにまた、模倣理論では、子どもが、代名詞を正しく用いるような、自分の見方に合わせて使用法を考えようなどことばの発達を説明することができない。また、複数形や、時間形、正しい

して、周囲の人が正しいものを強化し、正しくないものを消去するようになっているならば、心理学者が理論的に説明することは、もっと容易であろう。しかし、困難な事実は、幼児はひとたび喃語表現の段階を通りすぎると（この段階をとびこえる子どももある）表現はいちじるしくむだがなくなり、正確になり、ときどき誤りを犯すときも、ほんどの場合、自分の論理をもつてゐるということである。たとえば、ある三歳児の、政治家の父親が選挙でやぶれたといったとき「お父さん、心配することはないよ。また貼りつければいいよ」といった。明らかに、子どもは言語を機械的に学んでいるのではなく、知的に学んでいる。彼らは、おもてむきのことば以上のものを学んでいる。

それでは、ことばの学習とは何であろうか。

ことばの学習とは何か

言語の学習について教科書をよむと、語彙が言語のすべてであるかのようにみえる。ものの名前を学ぶことは、幼児初期の子どもの最初の言語学習には重要な部分であることは事実であるが、それは決してすべてではない。

子どもは文法や文章構成の「一般規則」を自分でとりあげ、こうなることも、模倣理論では説明されないのである。

もしも、子どもがいろいろの語や音をしゃべり、なかには適切なものも、不適切なものもあって、多くの誤まりをし、それに対

子どもは文法や文章構成の「一般規則」を自分でとりあげ、これを応用しはじめることについてすでに述べた。そして、話すことばの構造を学ぶにあたっては、子どもはこのようないくつかの規則は少しも意識されないし、まわりのおとなものこのような規則については無

頗着であることは興味深いことである。加うるに、子どもは何ら教えられないでも、驚くほど多くの種類の、超言語的な「操作」

(そのあるものは、前言語段階の類同語をもつてゐる)を学んでいる。たとえば、数えたり、たし合わせたり、評価したり、比べたり、抗弁したり、自慢したり、リズムをとつたり、韻をふんだり、からかつたり、冗談をいつたり、何でもないおかしなことをいつたり、想像の中で話をしたり、仮想したり、ことばの定義をしたり、推論したり、類似語をみつけたり、叙述をしたり、お話をつくつたりなど。これらのうちのあるものは、子どもが出手合った手本にもとづいて学んだものであるが、あるものは、学習の副産物あるいは自然的産物として生じたものである。

いま道具としての言語の学習について述べたのであるが、言語はまた内容をもっている。よちよち歩きの子どもは、他の人が話すのをきくことにより言語を学び、その言語によって、彼が住んでいる周囲の世界を学んでいる。周囲の人人が子どもに語りかけることによつて——質問の形で、あるいは、命令、冗談、叱責、話、警告、説明などの形で——明瞭あるいは暗黙のうちに、その物や物の性質が示され、また、空間時間関係、原因結果、分量の大きさ、有意義か無意義か、価値、善悪、可能不可能などが示される。おとなや年長の子どもは、言語操作の手本と、現実の世界の解釈を子どもに提供している。また同時に、子どもの自分自身の同一性の感じと自信をもたせることができるかどうか、子

どもとおとなとの言語的な関係の中できめられる。

一般的にいうならば、子どもは、——周囲の人びとの思考のしかた、人びとの語ることの内容や感情、子どもがいつたり、したことに対する人びとの反応のしかたなどによって——文化的環境を学んでいく。そしてそれが子どもの態度を形成し、認知したり、感じたり、思考し、学習する能力を作っていくのである。

二つのことをここでとくに記しておかねばならない。子どもは文化なくしては、眞の人間として成長することはできない——すなわち、子どもは、いかにして人間となるかを学ばねばならない。しかし、ある文化は、自由、独創性、創造性を促進させ、限られた能力をも、文化の革新に役立てるようにはたらく。そしてまた、ある文化は、人間性を窒息させ、人間の精神を歪め、鈍らせ、現実を隠し、偽わるのである。

言語学習の影響

言語を学ぶということは、言語による学習を可能にするものであることについてすでに述べた。また、人びとが子どもに話をすることに対して世界がひらけるのみならず、子どもは自分の経験を整理し、自分自身を教えることが可能になる。そこで、われわれは言語とはコミュニケーションの道具であるのみでなく、思考と感情の道具でもあることを忘れてはならない。われわれが具体的な現在の世界に住みながら、過去と未来の見通しをもつこ

とができ、仮設的な見通しをもつては言語といふ
シンボルの構造をもっているからである。また、美的、道徳的な
好惡の世界をもち、倫理的、実際的な抽象的な一般原理をもつて
ができるのも、言語のおかげである。ヴィゴツキ^(注1)にはじま
り、ルリア^(注2)によつてすすめられた一連の言語研究は、自己の方向
を見出し、自己統制をする上に言語が重要な役割を果たすことを
示している。われわれが空想にふけり、微妙な冗談をとぼし、自分
の性格や動機について自分自身をも偽わることができるのも、言
語をもつてゐるからである。私は因果的な結びつけをしようとする
わけではないが、人間の発達において、図式的表現は常に話こ
とばよりもおくれて発達するのである。そして、われわれが、神
話、芸術、哲学、科学などの形式によって、経験を再表現すること
ができるのは、シンボルの力をかりてはじめて可能になる。われ
われは、幻像体系としての言語機能をも忘れてはならない。

明らかに、われわれは言語なくして読むことを学ぶこともでき
ない。われわれの学習の非常に多くの部分が、実際に代わる代用的
な性格をもつており、印刷されたことはを通してなのであること
は見逃されやすいことである。印刷されたことばは、感情面の学
習についても、重要な素材であり、文学を通してわれわれは人生
の喜びや悲しみの感情にふれ、人間であることの悲哀と勝利を経
験することができるのである。一般的にいうならば、われわれ
は青少年の日常生活の中で、性の事実、老年や死、金銭、異常

や暴力などの事実から彼らを保護しようとするし、同様の意味
で、刺激の強い文学からも「保護」しようとする。たしかに、子
どもの鼻さきを、泥くさい現實にわざわざすりつけるようなこと
は、親や教師としてなすべきではないであろう。しかし、このよ
うな堕落的な勢力が、われわれの子どもたちの教育のまわりにあ
ることも、私どもは甘んじて受けとり、これに対処することがで
きるであろう。

上に述べたことから明らかなように、言語はわれわれを知的に
する。それは知能テストがよくできるというような狭い意味ではなく、新しい経験に目が開けるとか、深く多様な感情を経験し、
推理力や判断力を働かせ、相手の気持を知り、見通しをもち、信
念や信仰をもち、証拠を尊重し、内容のない表面的なことばや、
ことばの魔術に抵抗し、その他、すぐれた人と一般の人とを区別す
るようなあらゆる知的能力についていっているのである。私はこ
こで、ハントやファウラー^(注3)の説を支持したい。すなわち、知的個
人差は、その多くの部分が初期経験の差によって生じたものであ
る。そしてとくに、感情的同一化の力と、認知能力のよい見本が
発達の初期に与えられていることが重要である。

もしも、知能は子どものシンボル機能から発達するとするなら
ば、親や教師にそれを養うようにせねばならない。しかしわれわれ
は、一生物体である人間が、どのようにして意識をもつてよう
なり、自己統制、自己犠牲、利他主義、愛や憎、奇智やユーモア

および創造的で想像的な記号化が可能になるのかということについてはまだわかっていない。その故に、このような人間的特性は、たんに形而上の虚構の産物にすぎないとして、顧みず、明白にわかっている体系の中で押し進める」との如きのみが有益なものだと考えてしまう傾向がある。だが、両親や教育者としても最高の人間性はどういうものであるかを心にとめて、多くの子どもたちがそこに到達するような条件を備えるために努力せねばならない。そして、人間の行動と発達の科学にたずさわる者として、われわれは謙虚になり、まだわかっていない多くの曖昧なことがらについて寛容にならなければならぬのである。

媒介物であることを教師が認め、子どもたちが集団の中で芸術材料を創造的に用い、音楽を感情表現の素材として用いる自由を与えるのでなければ、それは圧力のもととなりうるのである。

今日の五歳児にとっての文化生活の経験*



*訳注 「文化生活の経験」というのは sharing の意訳である。文字どおりに訳せば「分けあうこと、役割をもつこと、関与すること」などであるが、本文の内容からいって、文化生活の経験の仕方についてふれてるので、このように意訳した。

メアリー・ジエーン・ルーミス

オハイオ州コロンバスにある、オハイオ州立大学の教育学教授で、付属校の初等教育研究・研究部部長、メアリー・ジエーン・ルーミスは、文化生活の経験は、家庭生活での経験の相互作用が、学校生活にも存続されるよう、その基礎概念をひろげて考えることを提唱している。

か、というしっかりした基礎概念をもつことによって、なにを、どのように、いつ、経験させたらよいかという、新鮮な考え方をもつことができるようになるのである。

子どもたちが幼稚園や学校にはいる前に、どんな文化生活の経験を学んできているか、という我々の価値判断は、今や変えられなければならないだろう。生活水準が向上し、いつのまにかうまくみんなが平等化されるような、マスクミなどの仲介手段があるおかげで、幼児たちにとって、文化生活の経験は、かなり変わったものとなってきた。時とともに、文化生活の経験についての価値や目標は、検討されなおす必要があり、五歳児にとって適当な文化生活の経験として、どんなものを与えたらよいか、よりよい方向を考えなおす必要がある。なぜ文化生活の経験が必要

経験が能力や資質を育てる

五歳児が幼稚園にはいる前に、どんな文化生活の経験をしてきているか、ということを知ると、幼稚園生活での文化生活の経験のあり方について、我々がどんな基礎的な概念をもつたらよいか、ということがわかる。多くの幼稚園では、子どもたちが「家から

話題になるものを持ってきて、それを見せながらお話をすると」時
間がもつけられているが、それよりもはるかに多くの経験を、大
抵の家庭で、子どもたちは家族のメンバーとして、もっといろいろ
経験している。家でどんな文化生活の経験をしてきているかに
ついて、もっとよくその概念をさぐってみよう。

もしおとなが、子どもたちに何でも自由に経験できるように可
能性をひろげてやると、子どもたちは、ある経験をとおして理解
した概念を、別の概念に適応させて覚えていくようである。だと
えば、「シェーバード」というのは宇宙飛行士だよ」とか、「アトラス
」というのは宇宙ロケットのことだなどと、十分わからないながら
らもそんな話をして、おとなをよろこばせたりする。こうして子
どもたちは、現在当面する事柄の中から、自分の知っている「宇
宙飛行士」とか「宇宙ロケット」という言葉を使ってはいるが、
おとなが理解しているような意味で「シェーバード」とか「アトラ
ス」ということは、わかつていないのである。* この例にみられ
るように、学習といふものは、こうした関連でだんだんになされ
ていくことがわかる。子どもたちが身近に当面している部分的な
* 訳注「シェーバード」というのは、固有名詞としては人の姓であるが、名
詞としては、羊飼とか牧師という意味もある。「アトラス」というの
は、宇宙ロケットの一種として名づけられたものであるが、名詞とし
ては、地図や図表のことをいう。ここでは、子どもがこれらの言葉を
宇宙と関連して使用してはいるが、他の多義的な意味を認識していな
い例としてあげたものと思われる。

経験に関連づけながら、もっと広い基盤にたった考え方ができる
よう、おとなは子どもの経験を整理してやるといふのである。
テレビは五歳児に、もっと直接、文化生活の経験の機会を提供
し、経験内容をつかめる働きをしている。何をどんなふうに見た
らしいかをおとなからあまり指導されないでも、テレビは子ども
たちにとって、よろこんで受けとめるコミュニケーションの手段
となっている。我々おとなは、五歳児のテレビの見方について、
あれこれやかましいはずにむしろ気楽に考えるよう心がけ
ればよいのである。幼稚園で部屋にててあるところでも、先生がある番組をえらんで子どもたちに見せようとしない限
り、子どもたちは、自分たちがいつもやっている遊びの方をえら
んで、テレビのあることを無視している、という事実もみられる
のである。問題は、テレビが「よい」とか「わるい」とかいうこ
とよりも、そのプログラムの内容が、どんなふうに着想や概念に
せまっているかという水準の方にあるといえる。

旅行は、今日では、五歳児にとつてはもう珍しいことではない
く、むしろよろこんでする経験だといえる。人々はだれもかれも
が、職業や階級のいかんにかかわらず、いろんな理由で、家族ぐ
るみでひらく旅行をするようになつてている。「なぜ旅行をするの
か」ということは、今や「どんなふうに旅行をするか」という課
題に変わってきているのであり、その経験の中で、子どもたちは

「世の中はどんなふうに、ことがはこんでいるのか」ということを探つてみると、全く新しい角度からその着想を言葉で表現したり、遊びの中にとりいれたりすれば、新しい文脈にたつた文化生活の経験を身につけることができる。そうすれば、「旅行をするときどんな経験をするか」ということを、もっとよく理解する助けになるのである。たしかに、なぜ旅行をするのかという面を考えるとき、一般に強調するように、旅行中「何をしたり」「何を見たり」していくかという点は、注目に値する。その方向にもう一度強調点を向けなおしてみると、旅行の経験中で、「やってみること」や「見てくること」などの目的ややり方などが、自分自身にとって個人的にどんな意味があるかに、焦点をむけなおすきっかけができる。また、文化生活の経験をとおして、自分なりにいろいろな意義を探求していくことにより、世の中で時としてみられる、はかないようなつまらないことでも、破壊的、無秩序なものとしてではなく、建設的なものとして効果をあげていくようにする洞察を得ることもできるかもしれない。

今までに、自分の住んでいた小さな山村以外に出たことのない子どもにとつては、「いなか」でのよかつた生活について話したり、そういう生活の仕方を続けていくことを支持されなければ、

せわしい下町の新生活は、おそらく混乱をきたすものとなる。新しい環境の中で経験する価値ある文化生活の経験は、場面への適応や新しい同一化を育てるのに役に立つようである。

もし我々教師が、子どもたちが何を経験してこなかったかということをはじめに強調するかわりに、たとえ今はまだ十分子どもたちの身についていないとしても、子どもたちが少しでももつている「文化的に意味のある」資源や能力の方を見出してやることができれば、自分自身や人を理解していくためには、どんな経験を広げていくことが大切であるか、また、それを我々は、自分自身にとつても子どもたちにとつても、どんなふうに妨げているだろうか、ということもわかつてくるのである。こうして肯定的な面を強調するということは、子どもたちの親にとつてもためにもなるのである。つまり、親と先生との関係にもととむくわれた変化をもたらし、今までどんな点が欠けていたかということよりも、もっと子どもの益する面に焦点をあてて、前進する方向にむかい、しっかりとした基盤にたつて出発できるようになる。

旅行というものを、文化生活の経験資源の積み重ねであるという面から考え、更に、次の学習経験のために、あらかじめよく計画をたてることによって、個人にとっての意義をひろげていくものである、という考え方たつていけば、どこに行こうと、旅行の意義はひろがるのである。

五歳児は疑いもなく、もつとたくさんの文化生活の経験をしている。ただここに述べた例は、今日の子どもたちがどんなことを知っているかという時に、我々の文化の中で成長していく場合、どんな点を大事なこととして強調していくべきであるか、ということを十分に示す例としてあげたものである。

「文化生活の経験」の意義

五歳児にとって、文化生活の経験の価値や目的は何であるか、ということを検討しなおしたり、何が「文化生活として意味がある」ものであるかを探つたりする前に、幼稚園児にとっての文化生活の経験が、どういう考えにもとづいてなされているのか、その由来をたどってみることは意味があろう。ムーア(Moore)は、文化生活の経験を、「アメリカの幼児のための文化の型」であつて、他の国ではあまり強調されない型だと説明している。^{*1} 自分の所有物を分けあうようにということを、幼児の頃わりに早くからおそれるという考えは、アメリカの現代の専門書や一般図書の中に、かなりよく強調されて出ている。このことは、子どもたちがお互いにおもちゃや道具を使いつりすることにより、どこかに所属しているという安定感を得ることと関連して考えられる。二〇人も三〇人もいる幼稚園で友だちと道具を分けあうことは、ある子どもたち、特に自分の家で少ししか物をもつていな

い子どもにとっては、当惑する問題となる。その点に関して、ムーアは、「五歳児だったらどの位お互いに分けあえればよいだろうか?」^{*2}と疑問をなげている。

道具や材料を分けあうこと学習する時、多くの問題をひき起こすから、順に番をきめていくという考え方をとりいれると、統制のとれた場面をもたらすようである。しかしながら、我々の文化で価値をおく分けあう気持というのは、自分が特別にもらったものまで分けあう、ということではないということを、先ず知ることが大事なのである。幼児が親やきょうだいと安定した関係にある時というのは、誰かに何かをしてあげたり、お互いに存在が必要だと思われたり、好かれたり、価値あると思われたりしていふ、と感じている時なのである。子どもたちは、得ようとするとかりでなく、与えたり目的を達しようとするのであり、多くの子どもたちは、かなり小さい時から、この経験を分けあうことと單に物を分けあうことの差を学ぶのである。

もし我々が、自分が子どもだった時に、どんなふうに経験を分けあう機会をもつてきたかを思い出してみたり、ずっと今日までの生活において、どんなふうにものを分けあう微妙ないろいろな経験を広げてきたかを考えみると、子どもの頭には、分けあうという考え方を、いくらか狭義に解釈して、無駄な時を過ごしていたと思われるるのである。「五歳児だったらどの位お互いに分け

あえればよいだろうか？」という間に加えて、「経験を分けあうには、もつといろいろな方法があるということを、我々は子どもたちに教えてやれないものだろうか？」という問も出したいのである。もしこちらの問に対する研究があれば、現代の文化の型において、経験を分けあうという本当の価値は何であるかということに、もっと接近していく助けになるだろうと思われる。

新しい見方にたつた文化生活の経験の価値と目的

文化生活の経験の価値と目的を考えなおしたものとして、ミラー（Miller）の書いた、幼稚園児の文化生活経験の面における知的発達についての記事は、非常に意義深く役に立つ。

生活を共にしている時には、分けあう物についての質問をしたり、子どもがそれについて話すように励ましたり、すでに分けてもらった物と関連づけたりすることをとおして、知的な成長を促進する機会がたくさんある。その物について話したり、関連性、再生、一般化、前後の関係、などを強調して学ぶことができる。^{*3}

我々が今日実際生活で認識している価値や目的よりもはるかに多くの示唆を、この言葉は包含している。文化生活の経験は、ある特定の曜日のある特別な時刻に限るわけでもなければ、ある種の材料に限ることでもない。しかし、効果的な学習をもたら

すためには、いくつかの面があるということが力説されている。即ち、概念形成の発達は、家庭でなされるという事実を、十分認識せざるを得ないと強調している。再生、一般化、前後の関連性などの学習の水準を、概念形成の発達を促進する方向にむけていくためには、ほかのどの学習経験にも必要なように、子どもたちがどこにいようと、各自にあつたやり方で、文化生活の経験をしていく能力が育つような機会を提供してやる必要があるのである。

最近の学習の理論の述べるところによれば、個人の成長の自己実現の面に焦点をおくことにより、かくれた知的発達の資力を見出すことができるといわれている。我々も少し場面の状況を変えてみて、将来の文化生活の経験の目的や期待を新しく見なおしてみれば、もっとよりよい価値を見出すことができるかもしれない。その場面や状況の例を次にあげよう。

- ・正確な標準語でなくともいいから、どんな話し方でも気楽に受けとめて、自由に話し合えるようにする。
- ・家庭で親子の間でどんな文化生活の経験をしているか調べる。
- ・幼稚園での文化生活についての子どもの考え方を、家での文化生活の経験の延長の場として考えているものだとみなし、歓迎してやる。

家庭から幼稚園という環境に移った時に、子どもたちが安定感をもつたために持ってきて離さない所有物について、みんなでうま

く遊べるような方法を考案する。

・どういう物が文化生活の経験を分つために供されたかということがよりも、それによって個人的にどういう内容の経験をしたか、という考え方方に主な強調点をおく。

・先生といっしょに「やつてみたこと」(文化生活の経験で)について、ほかの人たちに話してみると励ます。それによって、その子どもは同一化の気持をひろげ、ほかの子どもたちに興味ある内容をもたらす。

・知識を与えるだけでなく、記録したり、気持を話しあつたりして、子どもたちがいっしょに手紙を書いたり物語を作つたり、詩や歌が作れるようにさせる。

・ほかの子どもたちにまで創造的表現に興味をもたせることができるように、子どもたちが自分たちでつくった、歌や物語や詩を作るグループを励ましてやる。

・五歳児に、テレビの見方(概念化)や利用法を指導する。

・先生がやらせた経験をしている小グループが、ほかの子どもたちに新しい興味を育てる貢献ができるように励ます。

・日常生活の経験の中から、子どもたちのとらえた着想や考え方についての、評価的な意見を、励ましてやる。

・五歳児にとって、同じ年齢内で自他の概念が反映されるような場面を、幼稚園で作つてやる。

五歳児にはどんな文化生活の経験が可能か

もつと力動的な価値にもづきながら、広い意味での文化生活の経験という点から期待をもってみた時、五歳児は五歳児なりに、文化生活の経験の仕方を考案する貢献ができるようと思われる。子どもたちが学習経験をしているうちに、それぞれ小さいグ

・学校の内外で経験した毎日の経験内容の積み重ねの中から、適当な焦点をとり出せるような新鮮な方法をくふうする。
・家や幼稚園ばかりでなくもっと広い社会との関係において、文化生活の経験の概念を広げることができるような機会を与える。
少なくとも、ここに述べたいくつかの場面やそれに関連した価値観は、文化生活の経験についての考え方には、今までとはちがつた考えをもたらすだろう。「文化生活の経験をしていく時に、子どもたちにとっては、どんな経験が生じているのだろうか」という点に、我々の中心的な価値と関心を十分にむけていけば、型にはまつた、従順な、とおり一ペんなあり方はやめようとするようになり、もっと個人を高めていく、価値あるものとするために、改めていくようになるものである。そのような「文化生活の経験」なら、今日でもよくみられるようなバラバラな経験としてではなく、もっと幼稚園生活全般にわたって、有意義な交流をもたらすような経験にすることができる。

ループでの、あるいは全体のグループでの文化生活の経験において、その内容を発展させる機会をもち、その価値を理解するよう

になれば、我々は今までやつて来たように、週に一~二回特定の時をつかって、「経験したことを見ないわせよう」とするような日課にとらわれないで済むのである。

多くの五歳児は、「文化生活」の資源を幅ひろくそろえてやれば、おとの助けをかりながら、それを認めたり利用したりする点で、かなりよくものごとを識別する能力がきいている。たとえば、五歳児の多くは、次のようなことを認識するのに、もう幼すぎるようなことはない。

・家でしてきたりいろいろな文化生活の経験のやり方を、学校の場面でも適応しうる。

・家族が文化的社会的に認められている能力をもつていて、所蔵品をもっていると、今日社会的に生きた価値をもつものについての興味を育てる上で、貢献することができる。

・家族や友だちは、時宜えた興味を育ててくれたり、特別なところにつれていくつれたり、学校で必要とするような情報を提供してくれたりして、価値ある人的資源としての役割を果たす。

・学校にいる動物やペントを世話を責任を分担するために、動物たちに必要なえさを、個人個人で提供することができる。

・ふだん家で使っているような道具を、学校で問題解決や実験に

利用することができる。

・家族や友だちから習ったゲームや、自分たちが新しく考えだしたゲームを、興味をもつているほかの人へ教えることができる。

・今やりかけている課題に対して、うまく目的を果たすように利用するために、おもちゃや模型を家からもつてくることができる。

・今までに自分が経験したことについて、ひろくその内容を知らせるために、家にあって役に立つような本や雑誌や写真などを、選びだして利用することができる。

・音楽的な興味のためばかりでなく、いろいろな目的に、レコードを選んで適切に利用できる。

・自分たちで詩や物語や歌を作つて、先生や親たちに記録してもらえば、ほかの子どもたちにも楽しんでもらえる。

・「お話を時間」に限らずほかの時にも、新しい物語やお気になりの物語を、時に応じて適切に読める。

・旅行や映画などのように皆のするような一般的な経験は、感情や経験の幅を広げることができ、新しい興味の方向を得る助けになる。

・考え方や計画を、目的をもつて追求したり探求したりすると、もつといい考え方を産むことができ、それによって、目的をよりはつきりさせることができる。

・子どもたち全員に注目させながら、毎日くりかえし行なつて学

ばせようとするよりも、先生が提案したものを個々の子どもが手伝いながら、時々あるいは毎週順々に経験を積んでいくやり方の方が、はるかに興味をもたせることができる。

・文化生活の経験を分けあう能力は、お互いに手を貸しあつたり、考え方を分けあつたり、細かい配慮をもつて励ましの言葉をかけあつたりする学習をとおして、その経験の表現の仕方や考え方の確認をすることができる。

これらの例は、五歳児が今まででももつていた文化生活の経験に、新しい経験をどう調和させながらその幅を資源的に、内容的に、いくらかでもひろげることができるかどうかということを我々が考えなおす助けになるし、我々の価値観のわくを改めて、もっと深い洞察をもつように充足して考えていく助けになる。

あらたに見なおし、新しく理解しなおしたやり方によつて、我々は子どもたちに、できるだけいろいろな種類のことを、幅広く計画し、実行にうつすようにしてやることができる。子どもたちの目的としていることを、我々おとなはよくきてやらない限り十分理解できないものであるが、子どもたちの目的に我々の目的がよく調和できるようになれば、はかりしれないほど文化生活の経験のやり方に、柔軟性をもたせることができる。そうすればまた、きまりきった型にはめこんで、ある経験から次の経験へと、ただむやみに経験を変えて与えるというような、つまらない誘惑

をさけることができる。このように、文化生活の経験を、どうやつしていくかとすることは、五歳児が今までに何を個人的に経験してきたかということ、決してきりはなしては考えられないものである。更に、幼稚園時代に適切な時をみはからつて、どんな条件でどんな内容のものを与えれば、もつと建設的な水準で学習させたり、相互の関係を学習させることができると、いうことも忘れてならない問題である。

指導上の問題点

要約すると、文化生活の経験は、その背後にある考え方ということが、最も大事で価値あることなのだ、ということを、ここで再び強調したい。文化生活の経験は、個人のもつてている潜在的な可能性を、創造的、自発的に表現し、発展させる手段となり、それによって究極的には、個人を、集団を、文化を、高揚していくことに貢献するものなのである。文化生活の経験といふものは、文化の重要な型を育てるためにも、価値あるものとして存続させ経験させていくべきものである。したがつて、文化生活の経験が、本当にその真価を提供しているかどうか確かめるために、今ひろく行なわれている経験のあり方を再検討していくことから、出発したいと思う。先生たちがすでに問題意識としてとりあげておられる諸問題に加えて、我々は次のような点についても、考慮して

いく必要があると思われる。

一、子どもたちの幼稚園や学校での文化生活の経験を、どんなふうにひろげてやれば、家の方向に似たがちで、望ましい方向に、経験をむけていくことができるだろうか。五歳児の文化生活の経験として積みあげてきた能力や資質については、すでにこの紙面で論じたが、ある限られた一面についてだけ考えてきた。もととひろい立場からの評価が必要であって、それは、いろいろな場面条件における先生たちによってのみ、ひろく検討することができると思われる。

二、物をみんなで分けあうといつゝとは、生活経験の中では限られた経験ではないだろうか。もしそうだとしたら、そういう限界を、我々はよく注意して考えなければならない。はずかしがりとか、何かがうまくできない子どもたちにとっては、そうした限界も、ある点で安定感を与えることになるが、何でもうまくこなす子どもたちにとっては、それだけではあまりに限られてしまい、もと別の生活経験から得ることがあると思われる。

三、幼稚園や学校の環境自体が、どんな点で意義深く生きた内容の文化生活の経験を与えることができるだろうか。我々がふれてきたいくつかの考え方は、文化生活の経験としての環境条件の見方を、いくらか変えたかもしれない。学習場面を生きたものにするための我々の目的を考えなおすにあたり、文化生活の経験

が、ただバラバラに関連のない日課のような経験としてでなく、たくさんのちがつた経験を補いあっていく機能となれるような新しい方法を、発見していくべきである。

四、文化生活の経験の、本来の目的を見出す、もとよりよい方法を探り出すためには、どんな新しいわく組を考えれば、先生たちにとって役にたつだろうか。その基礎となる、ある面については、すでにここで述べてきた。実際にその新しいわく組をどう発展させるかということは、我々の提案したその基礎を修正し探し、更にそれを適切な時にうまく将来役に立つようなかたちで実行にうつすように、その新しいわく組をつくりなおしていく、先生たちの掌中にあるのだといえる。この線にそつて我々が最善をつくした時に、今日の五歳児にとって、意義深い相互関係をもつた新しい水準への方向づけが、可能になるのである。

後記 文中、特殊な用語の訳については、東京大学教育学部助教授 東 洋先生の教示を得た。記して謝意を表する。

(日本女子大学・宮本美沙子訳)

*原注1 Eleona H. Moore, *Fives at School*(New York: G.P. Putnam's Sons, 1959), p.78.

*原注2 同掲書 p.83.

*原注3 Isabel Miller, *Kindergarten Goals and Activities* (Columbus: Center for School Experimentation, Ohio State University, Summer 1960), p.5.

読み方の早期強制

ジエームス・L・ハイネス

カレッジバークのマリーランド大学の教育学教授であるジエームス・L・ハイネス(James L. Hynes)は、早期読み方教育の強制をすることに反対の立場をとっている。

赤ん坊に読み方を教えようといふのか？この企画の主唱者は、何と途方もないことを考へてゐるんだろう。

時から、また——もしもあなたがたいへん聰明であるならば——生後十か月という早い時期からはじめる、ともできる」と。

こんなばかげたことは、不親切どころか、偽りの祝福である。

レディス・ホーム・ジャーナル(Ladies Home Journal)の一九六三年五月号に、当時、子どもたちや親たちに大へん不親切と思われる記事が載つていた。著者たちは主張する。

「あなたのお子さまに、読み方を教える最良の時期は……お子さまが約二歳になつた時である。……もしもあなたがたが、ちょっとしたトラブルを覺悟の上でなら、お子さまが生後十八か月の

レディス・ホーム・ジャーナル(Ladies Home Journal)の一九六三年五月号に、当時、子どもたちや親たちに大へん不親切と思われる記事が載つていた。著者たちは主張する。

なぜなら、より早く、そして、もっと早く読み方を身につけさせ、五歳で、四歳で、三歳で、……そして、とうとう、「赤ん坊にも読み方を教えられます」とまでいい出して、明らかにむりなことを自ら証明しているのである。

この素材は皮肉に書かれてはいるものの、当の著者たちは大まじめであると、読者は思うべきである。しかし、意識するとしないにかかわらず、彼らは、読み方の早期教育の「方法」と「体



系」にまつたく皮肉な結論をくだしたことになる。

六歳・五歳・四歳・三歳——そして今や、この記事のおかげで、ばかりたことには、二十四か月、十八か月、そしてあろうことか生後十か月で読み方を教えるというに至った——こんなにまで急がなければならぬのはなぜなのかという疑問を、両親、教師、管理者の中に生じさせたなどいふのは、大きな効果であった。

個人差の無視

誰も、この論文が個人差を全く気にとめていないことに驚かない人はなかろう。

「あなたの赤ん坊に読み書きを教えられる。この文章は、あなたにどうして赤ん坊に読み書きを教えるかを告げるであろう」『あなた』の『赤ん坊』、あなたの赤ん坊はまだおしゃべりしていませんか？あなたの赤ん坊はおとなしいですか？きかん坊ですか？

どっちにしても赤ん坊は所詮赤ん坊である。赤ん坊でなければしょうがないが！人間の赤ん坊でさえあるならば、六歳でも五歳でも七歳でも、何歳の子どもでも教えられる。こっちに当てはまることは、そっちにも当てはまる、というような單純なアプローチは、よい教育者のとる道ではない。『甲の薬は乙の毒』といふことを心しておくことは賢明である。おそらく生後二十四か月で読み方を教わる用意をし、喜んで教わろうとしている子ども

はない。しかし、四歳か五歳になれば、いくらかの子どもは読み書きを教わる準備ができる、また読み書きができるであろう。

しかしこのことは、すべての子どもがそうだということを意味しているのではない。また、スタートの早かった子どもが、おくれての子どもよりも、より幸福であるということをいつているのもない。真に幸福な子どもといふものは、彼が彼自身であるということを許されている子どもである。この論文はまた、こうもいつている。「ちっちゃな子どもたちは読み方を覚えたいと希望している」多くの母親は、彼女のちっちゃない回る子どもを見て、「この子ではない、誰かほかの子だろう」と笑うだけの余裕がある。

読み方のできる年齢はそれぞれの子どもの独自の時期にやつてくる。

この記事を読んですぐに、「なんでそんなに急ぐのか？なんでも、そんなにあわてるのか」と即座にだれしも疑問をもつた。また、この記事は、雄弁にも次のようなうまいことばをいつている。「子どもといふものは、勉強することを狂気のように欲している……勉強することは全人生における最大の冒險である」と。しかし、二、三歳の子どもの母親は——指をつっこんだり、興味をもってじっとみたり、味をなめてみたり、たずねたり、さわ

つたり、眺めたりする二、三虚見なのである——このちつちやな子どもは、決して本なんて読みたがっていないということをよく知っている。読むということは知識への道程であり、そしてすばらしい道ではあるが、間接的な代用の道である。だけれども重要な道である。しかし、読むということは知識に到達する唯一の道ではない。どうしてそんなに急ぐのだろうか。

なぜ知識を得るのにもっと他の方法を考えないのだろうか。

とくに、読むということは、子どもによってできるようになる時期がそれぞれ違うのに、また、子どもが自身でそれぞれの段階でその時期に適したすぐれた学習の道をもっているのに。この記事を読んで最後に読者がわかることは、子ども自身こそ最善の「ほんとうの本」であるということであろう。そこでは、文字通り、「鼻は足の指ではない」という貴重な教訓が記されている。早く読むと「学問的能力の卓越性」と呼ばれているとは、

早くにできるためにはどれだけの代価を払わねばならないか

誰でもこの記事を読む人は、こんな早期に読みかたを覚えさせにはどれほどの代価を支払わねばならないか考えるだろう。この記事の著者はくりかえし主張している「これはたとえあなたが

どんなにへたな勝負をしても、いわば、必ず勝つゲームですよ。あなたがそれに勝たないようにするためには、考えられないほどへたな勝負をしなければならないのですよ」と。

しかしどうしてそういうことがわかるのだろう。行動の問題について、あなたは本当に罰金を払わないですむのだろうか？ 態度において、思考において、人間関係において、感情において、あなたはなたは何かをし、その代価はなくてすむだろうか？ 態度において、思考において、人間関係において、感情において、あなたはすべてに勝つことができるだろうか？

だれの目にもふれるような一つの値段表がすべての商品についている。すなわち、子どもを操縦すること、おとなが統制し支配することおよび人間関係のゆがみである。

「」の読み方あそびは、よい子だけがしてよい。悪い子はこのゲームをしてはならない。……もし子どもが“A”といつたら… …その子どもにあなたが愛していることを知らせなさい。彼をほめてあげて、抱きしめることは賢明である……。さあ、魔法の階段をもう一段昇ろう、魔法の広場において、魔法の戸を開き、そして次の魔法のことばをみつけ出そう」このような態度が家庭教育の妨げになり、また、学校教育の妨げになつてゐるのである。人工的なくふう、しかけ、馬鹿げたステレオタイプのおしゃべり、ゲーム、ワークブック、報酬、無言のおどかし、機械の利用。これらすべては子どもがほんのちょっとおぞくしさえすれば無意

味な試みをしないでもできるのことを、少しばかり時期を早めるための試みなのである。このような無益な生活は、現在、子どもにどのような代価を支払っているか。将来にどのような代価を要求しているか。すべてのことが代価なしにすみ、いつでもあなたが勝つとは、誰が信じられよう。

レディス・ホーム・ジャーナルの記事のおかげで、多分、子どもたちを質屋の質ぐさとして使わないように少しは決心するであろう。すなわち、幼稚園の五歳児を読み書きやワークブックでなやませないようになるであろう。また、ヨコヨチ歩きの子どもにアルファベットの「A」を示して、Aといわなかつたら、ゆっくり十まで数えて、あなたははつきりと、ニコニコとして、「これはAですよ、ね、わかった？」というようなことはしなくなるだろう。

「はつきりと、ニコニコして」いわなければならないもつとよいことはたくさんある。そのひとつは、このジャーナルの記事のみせかけの祝福であることに感謝する、今や、われわれは子どもたちをありのままにうけいれ、個性に応じた教育をし、それぞれの子どもが自分の持っているすべての力を十分出すことを助け、子どものありのままの姿に満足し、さらに子どもたちがどんどん成長し、現在を嬉々と生き、未来に希望をもつてたくましく成長するであろうということを信じてする仕事にもどつていくことにしよう。

(洗足学園短期大学・木原溥子)

幼児の教育 原理と研究

津守 真 木原溥子編

本書は「幼児の教育」誌に掲載された論文をまとめたもの。

内容——第一章「幼児教育の課題」では幼児教育全般にかかる問題を扱う。第二章「幼児教育の原理と方法」では教育課程、指導計画、子どもを観察する技術などを知る上にまた概論書としても適切である。

第三章「保育の中での研究活動」では、保育研究の基本論、さらに実践記録の具体例をのせてある。第四章「幼児教育制度をめぐって」は義務制の問題など制度上の問題を衝く論叢。

執筆者——牛島義友・及川ふみ・恩田彰・斎藤文雄・坂元彦太郎・清水エミ子・莊司雅子・昇地三郎・鈴木正子・多田鉄雄・津守真・樋口三紀子・日名子太郎・堀合文子・松村康平・水原泰介・山下俊郎・渡辺桂子他

A5判 四三二ページ 六五〇円
発行 フレーベル館

スペインの幼児教育

西 本 僕



施設の種類

初等教育に関する法律（一九四五年七月一七日公布）によつて、

いところでは、幼児は校内の設備が許すかぎり、小学校に通うよう勧められています。

組織・財政・管理

まな段階についてこまくしるし、最初の時期には二歳から四歳までの幼児の保育学校（nursery school）と、四歳から六歳までの幼児の幼児学校（infant school）とがあると、はつきり書いてあります。保育学校・幼児学校は、官学とも私学とも関連して準備されています。

そのうえ、幼児の愛護を目的として考えられた各種の施設（託児所・保育所など）があつて、本来慈善の目的を持つていますが、また教育の仕事を引き受けています。

六歳以下の幼児が小学校に通うことを許すかどうかの問題は、幼児教育施設があるところでは起こりません。幼児教育施設のな

とりの視学官は、学校を管理している組織体や学校の種類にかかわらず、自分の受け持ち区域内のすべての学校を管理します。

いろいろな特色

幼児教育は義務ではなく、随意です。入学を許される最低年齢

は、保育学校で二歳、幼稚学校で四歳です。託児所・保育所・児童ホームでは、生まれたての赤ん坊から受け入れます。

幼稚教育は、全部の公立学校と、かなりの数の私立学校で、完全に無料です。

学校建築についてきめた基準によると、一幼児学級当たりの幼児数は二〇人のはずですが、実際には三〇人から四〇人までさまざまです。

教育活動と方法

初等教育の分野に関する官報と独立雑誌には、いろいろな示唆が提供されていますが、教育活動に関する公式の指令は出されていません。たとえば、「学校生活」(Vida Escolar)という雑誌——初等教育文書指導センターの公式機関誌——には、保育学校と幼稚学校を含むすべての教育内容で、またすべての教育段階で、教員が使うための手引きを発表しています。

家庭との協力

学校と家庭との間の協力は組織的に行なわれており、家庭との接觸のひとつの目的は、教育の仕事で母親を助けることです。

医学的管理

を得るために、幼児はその年齢段階にびったりして、心理学的な

原理にかなった教育的な遊びと実際的な経験をもちます。

スペイン語の読み方と書き方を教えることは、幼児教育のおしまいの年、つまり五歳になつたらはじまります。数についての最初の経験は、児童心理学の原理が許すかぎり、早くから児童に与えられます。

研究の中心施設

幼児教育に関する特別な研究の中心施設はありませんが、国視学官も、そのほかの公共団体も半公立や私立の施設も、女教員のために現職高等訓練課程を用意することを保証する方法を講じています。

経済生活・労働生活との関係

初等教育に関する法律の第一九条のもとで、保育学校と幼稚学校は、最も人口密度の高い地域に開かれなければなりません。母親が働いているために、六歳以下の幼児を預かる施設を必要とするような工業や農業の中心地に、十分な数の保育学校や幼稚学校を開くことは、義務になっています。

連絡しています。学校医療奉仕があるところでは、学齢児と同じように、幼児教育施設の幼児に、それが利用されています。こんな医療奉仕がないところでは、市の衛生検査官が学校の管理を行なっています。

どの学校もみんな、午前中のいろいろに、簡単な食事を幼児に与えます。数クラスある学校では、学校の購買部が幼児に昼食をさし出します。

からだが弱い幼児のためには、山や海での休日キャンプを夏休み中に計画したり、そのほかのサービスを行なっています。

安全と輸送

学校は、幼児がたやすく行けるような場所になればなりません。多くの私立の教育施設は、自家用バスを行なっています。

建物と設備

学校の建物は、六歳以下の幼児をめざした建物に関する特別な

条項を含み、さだめられた一定の技術上の必要条件を満たさなければなりません。

教員の養成

保育学校と幼稚学校は、特定の競争試験に合格した女教員にゆだねなければなりません。この競争試験は、少なくとも一年間教えたことのある女教師に開かれています。児童愛護資格免許状を持つていることは、志望者にとって有利です。

幼児教育の女教員の高等訓練のために、短期の現職課程が定期的に開かれています。普通に必要な免許状を持っていない人々は、幼児教育にたずさわることを許されません。

教員の身分

公立の保育学校や幼稚学校で教育にたずさわっている女教員は、法律上・行政上の立場から、小学校の女教師と同じ身分です。給料については、幼児教育の女教員は、小学校女教員の給料に特別手当を加えて受け取ります。

保育学校と幼稚学校の女教員は、一般の教員と同じ地位を占めているので、もし小学校にかわりたいと望むならば、転任を規定する条件を満たしておれば、初等教育にたずさわることもできます。

幼児教育の発展上の困難点

目下、文部省にとつては、幼児教育の編成と、義務教育を受けなければならないすべての児童の通学を確保するのに必要な建物の建設とに、注意を集中することが必要です。これは、現在遂行されつつある国の学校建築計画のもとで追求される目標です。これらの目標を達するのに、文部省は幼児教育の問題を取り上げ、六歳以下の幼児が通学できるに足りる建物の建設に留意することができるでしょう。

ボルトガルの幼児教育

組織・管理

幼児教育は、おもに中心都市に、私立・公立または半公立の施設——幼稚園、幼児学校、児童公園など——が用意されています。いくつかの教育施設では、個人・慈善団体または会社の主導権が責任を負っていますが、ほかの施設は、市町村自治体・州議会・社会援護庁などが管理しています。

社会的・医学的方面

私立学校はもちろん、公立学校でも半公立学校でも、医学的援助の準備をしていて、多くの学校は無料の給食を行なっています。

たいていの場合、学校は幼児の輸送のための用意をしています。

教員

私立学校の高等視学官——文部省が管理している視学官の職——は、私立の幼児学校の監督を受け持っています。いくつかの私立の幼児学校は、国から補助金を支給されています。

教育内容と方法

私立学校の高等視学官——文部省が管理している視学官の職——として働く女教員を養成する特別な学校が二つあります。この養成施設は、国から補助金を支給され、公式の資格免許状を授与します。その課程は二年かかり、幼児学校での三か月ないし六か月間の教育実習で仕上げが行なわれます。入学を許されるためには、国立高等学校（リセ）課程の第二段階を修了してこることが必要です。

モンテッソリ（Montessori）、デクロワ（Decroly）、および「メゾンドペティ」（Maison des Petits）[オーデ・マル（Aude-mars）]とラファントル（Lafendel）]の方法が用いられ、ボルトガル人の幼児に使ったために翻案されています。

いくつかの幼児学校では、幼児に外国语（フランス語か英語）の最初の経験を与えてています。

(大阪樟蔭女子大学)

ベルギーの幼児教育(二)

足立寿美

ジアルダン・ダ・アンファンを訪ねて

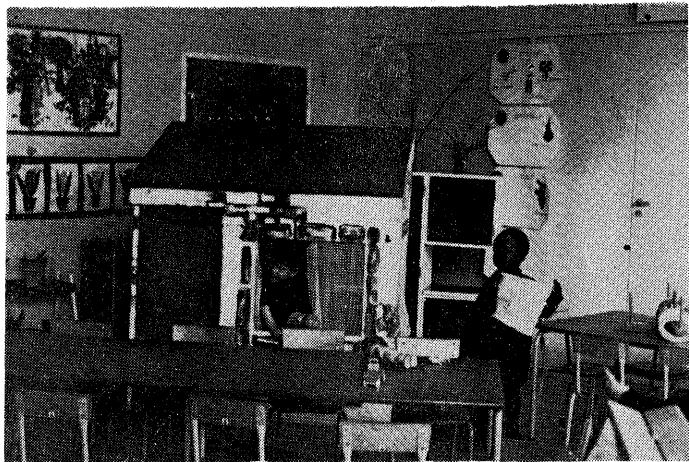
四歳児

ここで、実際の幼稚園についてお知らせし
ましよう。訪ねたのは、ヤンセン市長が紹介
して下さったコミュニーン(公立)の『レエ・
ブッサン』(子どもの愛称・育ちゆくものと
も訳せると思います)で、私のアパートから
歩いて十分、ちょうど新しいアパートの建ち
ならんだ住宅地の裏側にあります。

ここも日本と同じように四歳児・五歳児・
六歳児と各年齢ごとにわけられています。ま
ず最初に、各年齢グループごとに参観した時
のようすを述べてまいりましょう。

その日は、ベルギーにしては珍しいほどのお天氣で、大き
くとられた窓から日がいっぱいにさしこんで、教室の中はとても
明るくあたたかです。

受け持ちの若い先生と、ポンジュールと握手をかわす私に一齊
に子どもの視線がむけられています。教室の中には、約三十人近



くの子どもたちが、二つの机にわかれています。四人の子どもは水遊びです。あるいは小型のタライが机の上におかれ、そのまわりをグルリとどりかこみ、タライの中でコップからコップへと水をうつしています。他に八人、砂あそびに呼ばれました。

「さあ、お行儀よく、いい子にしている人から遊びますよ」と

合に、とても居心地のよい、和やかな教室です。私が先生の机の横に腰を落ち着けるとまもなく、「これから自由遊びです」と、先生がおっしゃって一日の活動がはじまりました。

「お父さんとお母さんごっこをしなさい」といわれてはいっています。たくさんの植木鉢と金魚、

一角に先生の机、それに面して、赤い屋根に、レースのカーテンがかかっている

「お父さんとお母さんごっこをしなさい」といわれてはいっています。むかい合わせになつた四人はコップに砂を入れたり、ボートをくぐらせたりしています。また他のふたりは、例の小さな家のなかで縦一メートル半、横八十センチくらいの机がひらくようになっています。その中に約二十センチの深さに砂がはいつています。

「お父さんとお母さんごっこをしなさい」といわれてはいっています。縦一メートル半、横八十センチくらいの机がひらくようになっています。その中に約二十センチの深さに砂がはいつています。

水遊びにしても、また砂遊びにしても、それは狭いところでいつもやるわけですから、ちょっと横でも振りむこうものなら、すぐ隣の子の邪魔をすることになります。したがって、「○ちゃんが僕のを取った」「○○ちゃんが邪魔をする」という訴えなどがしそつちゅうきこえます。それに対して先生は「シイー」と静かにいい子で遊びなさいと繰り返し、いってらっしゃいます。水遊びをして元気よくバシャバシャ水をとばしていた男の子は、どうとう机につかされてしまいました。

どの遊びにも加われなかつた子どもは、机について静かにしています。その間にも、ひとりまたひとりと遅刻して子どもが登園

です。ベネズエラ人のカルメンは、バナナを口にほうばりつづ、現われて、先生の次に私のところにとんできました。私はそのバナナの一杯ついた手と握手せざるを得ない状況におかれただけです。

二十分もたつと、訴えごとに夢中で遊んでいる子の方が少ないくらいになり、自由遊びは終わり、次はイースターの卵型のチョコレートと、その入れもののかごを使って「大きい」、「小さい」、「中位」という言葉の勉強にはいりました。

言葉の勉強の後は元気よくリズム遊びです。先生のタンバリンの音に合わせ、机のまわりをすり足したり、かけ足したり、ボォンと止まつたり、クラスで一番小さい女の子がのろいので、後がつつかえ大変です。日本だと、恐らく教室に一台のオルガンかピアノがあると思いますが、ここでは、特別に音楽教室にあるようです。この後いっしょにお手洗いにいきます。これは二クラス共同で使えるようになっていて、左手に男の子用、正面に女の子用がずらりと並んでいます。「男の子と女の子いっしょですか」と尋ねると幼稚園は共同で小学校から別々になっているとのことでした。お手洗いのすんだ子からお十時をもらいます。

日本だと、一体に、食べる時、どうしていただくか問題ですが、ベルギー人はもっぱら味を楽しむ主義らしく、どこで、どんなふうにということは気にしないようです。ボンジュールと食

べながら教室にはいって来た子はいく人かいましたし、町でも立派なミンクのコートを着、ミンクの帽子をかぶった、立派な婦人が丸いアンパンなどを袋でくるんで食べているのに出くわすのも稀ではありません。また、その量とスピードは驚きにあたいます。もつとも行儀にかまわないというわけではなくいつかもレストランで、アメリカ式に、ナイフで一口切り、フォークを持ちかえて食べてましたら、いかにもこの野蛮人め、という感じで眺められ、ヒソヒソときさきやかれたのには閉口しました。あまり私の方を観察するのに気をひかれ、その婦人はついにお魚の骨がさきつてゴホンゴホンとなつた時は少しこちらも余裕がでました。

五歳児

「五歳になるとの前の四歳と異なり、ずい分といろいろなことができるようになりますよ」とデュブルュイソン女史は少し得意氣です。

教室の中は四歳児に増して、一層にぎやかです。小鳥が二種類と、緑葉植物、それに加えて子どもの絵やら観察日記などが四方の壁、さらに天井にまでひもでつるされているという具合です。

ここも今日は四歳児と同じくイースターの卵を材料に言葉の勉強中でした。

——卵は何にはいっていますか。

「カルトン」

——どうしてかしら。

「こわれるから」

——そう、卵はとてもこわれやすいから。

——さあ、いくつあるか数えましょう。ビエール！

(ビエール、一つ二つと十まで数える)

——ビエールは十コあるといつてますよ。指で十を示して下さい。

い。

——さあ、こんどは形、卵はどんなかたちをしてますか？

「白」

——それは色ね、形は四角とか丸いとかいうでしょ。

「まる」

——そう丸を長くした形ですね。橢円形。

——卵のこの外側のかたいから（と指でたたいてみせる）をなんというかしている？ 卵のから。

(みんな口々に先生のまねをする)

——さあ、割ると中から何かでできますよ、これはなあーに？

「水」

——水？ 水みたいなものだけど、これは卵白。これで全部か

しら？——

「ノンノンきいろいろのがある」

——そうね、卵の中には卵白と卵黄があります。ほら。

(と全部、うつしおわる)

「子どもたちは一齊に立ち上がり、先生の机にやつてこよう

する。先生は今、もつてまわりますから席に行儀よくすわってと

指示する。この時、横にすわっているデュブルユイソン女史が、

「卵白は透明ね、あらこれはまだ少し難しそうかしら」

——そう、透明、むこうがすけて見えるでしょ？ 卵黄はお

さらのむこうが見えないから透明じゃないわね。

(～～)がひかれている言葉を習得する)

このように子どもの身近な材料、野菜や果物・植木を主題にして言葉を学びまた細かく観察し、みたままを絵に描くという方法がさかんに使われているようです。

輪になつてすわっている十五、六人の子ども(この日は流感で多くの子どもが欠席)はモロッコ人ひとり、コンゴ人ふたり、アルジェリア人ひとり、東南アジア人ひとりにベルギー人という組み合わせで、その中にはまだフランス語のよくわからない子どももいます。私のフランス語では知らない言葉も多く、「これではフランス語をならない幼稚園に來てもいいですね」とデュブルユイソン女史にいつたことです。

割られた卵はその後、オムレツに使われます。教室の一角には小さな電気コンロがあり、バターがジーーととけはじめました。



もう言葉の
勉強が三〇分
以上も続いて
いるわけで、
そろそろそこ

ここでいたず
らがはじまり

ました。その
うち男の子ひ
とりが私の傍

にやって来
て、今にも泣
き出しそう

に、「マダム、
ニコルが僕の
椅子けとばす

の」と訴えま

した。

その時です。「少しうるさいですよ。このマダムは遠い遠い日
本の方でみんなの学校をみにいらしているんですよ。ベルギーの
子はすごくおしゃべりでお行儀がわるいと思われてもいいの？」

静かになさい」これでみんなのいたずらの手はストップ、私の方
に一斉に視線が集まりました。子どもたちの気分を変えようと受
け持ちの先生は「水車の歌」をうたいはじめ、みんないっしょに
手をグルグルとまわしながら合唱です。その間にオムレツのいい
においが教室の中にブンブンにおいはじめました。

私としては動きたくってムズムズしている子どもが、これから
どのようにしていくか興味のある点でしたが、椅子をゴトゴト
とさせている子どもを前にデュブルヌイソン女史は大層当惑した
ようすで「小さい子どもはとかく注意散漫で困ります」とおっし
やり、次のクラスに移りましょうということになりました。

どの教室にも、たくさんの中同時にマリオネットがかざら
れ、ステージが隅の方に置かれているのが目にできます。六歳児
の教室の前には、それはおもしろいのがかざられているので、興
味深く思っていましたらちょうど五歳児の三つめのクラスがマリ
オネット製作中でした。

子どもたちはコの字型に先生をとりまいてすわっています。こ
こも例の「さあ静かに腕を組んで……」とさかんに静かにされる
ことが要求されています。中央の机の上には毛皮の細いの、眼鏡
のつる、赤・黄・白の三種の毛糸、貝型のマカロニ、ボタン、帽
子、鳩のはね、押花などがかごに入れてあり、その他顔の土台に
使われる卵大型大小二つ、洋服になるらしい四角いキレが三枚置か

五歳児・卵のから人形作り



れています。

大きい卵型
に人指し指を

つっこみ、子
どもにみせな
がら、「どこ

からはじめま
しょうね」と
たずねます。

一斉に、鼻だ
の服だの目だ
のという答が

返って来まし
た。先生はみ
んなをみまわ
して「○○ち

ゃん」と指名
し、呼ばれた子は先生の机から、好きなものをえらび、のりをつけ、卵型の上にはりつけます。スマレの押花が口になり、金色の
あるいは布が目になり、めがねがつき、帽子をかぶり、とだんだん
ん形が整っていきます。何しろ先生の指に土台がささっているわ

けですから、なかなかうまい具合に力がはいらず、結局、先生が子どもの手を持つておさえつけるまでにしないとつきません。貝

型のマカロニを目に使った子は、左右、高さをちがえてはりつけ「あがり目にさがり目」をいっしょにしたようになります。先生はそれもみんなにみせて「こんなに目がはなれているのはおかしいわね」とい、両方同じ位置につけかえました。

でき上がるところなどは名前をつけてもらいます。いろいろ発言があり結局、アドレянとすることにおさまりました。

ひとりの子どもが先生の前で、口をつけたり、目をつけたりしている間、他の子どもは静かにみているわけで、勝手に席を立つと注意をうけます。男の子は一体に関心が低く、となりの子といなすらに忙しい様子でした。このマリオネットは子どもの想像力を育てる目的でやっているところで、午後はこれを使ってお話をしたり、お芝居をしたりするのだそうです。すでにマリオネットのエキスパートが幾人かいるらしく、「先生、私とミッキィルにさせて！」と注文が出てきます。

そういうえばはじめに述べたアニーもマリオネットが大好き、いつも遊ぶと必ず最後はマリオネットということになり、自分の部屋から熊をはじめ、人形などをほこび出し、ひとつひとつ声をかけての大熱演になります。

幼稚園児が異なった文化環境に 適応する過程の記録

柏木 恵子

これは日本人の両親とともに米国にいき、言語も風習も異なる米国の幼稚園に入園した、日本の一幼児が、異なった文化環境にどのようにして適応していくかを示す一記録である。

クリスマス休暇があると同時に（こちら

にきてから約十日目）

近くのラファム公立小

学校の附属幼稚園にはいる。この学校は、私

どもの住いから近い普

通の小学校で、大学の

スタッフの多く住んで

いる地域のように、外

国人や大学関係者の子

どもは特に多くなく、

むしろごくまれ。幼稚

園から六年まであわせ

ても、外国人はうちの

子のほか、中国人の双

生児とインド人の男の

子がいるくらい。した

がって、とても珍しい

偏見や敵意に合うことは、まざないところであった。

子どもは六歳一ヶ月だったから、本来のこちらの制度ではすでに九月から一年生にはいっている年齢だが、言語のハンディを考慮して、幼稚園に入れることにした。

息子は幼稚園に行くことに、ややちゅ

うちょを示し、必ずしもよろこんで行こ

うとはしなかった。連れていってひとり

おいて帰ろうとしたとき、何とも不安げ

ななきれない顔をしていた。ただこの前

日、近くの洗たくやで、たまたま一緒に

なつて少しの間遊んだ子が、そのクラス

にいて、息子は千人の味方を持ったよう

に感じたようす。この子は帰り道もずっと

一緒にだつたし、またとても積極的に活

発な子であつたりして、その後ずっと親

存在となつたが、珍しい関係になる。

第一日目は、迎えにいったとき、先生

に聞くと、案じたように泣いたりせず、何とか一緒にやっていた由。本人は「みんながぼくの顔を見る」といい、珍しが

られ、注目されることをしきりに意識している。

第二日目、「今日うちでぼく仕事があるんだ」とか「いそがしいんだ」とかいって、幼稚園へ行かない予防線をしきりに張っている。「うちにいてもお友だちもないし、つまらないでしょ」と励ましてつれていく。帰りはいつてよかつたと満足している。

その後はいやがらずにいくようになつたが、一週間ほどは送り迎えする。この頃はもちろん一語も英語は話せず、しかし、平気で日本語で話しかけたり、呼びかけたりしている。

一週間後からひとりで通園するようになる。近くの上級の男の子にたのんでみると、一緒に行ってくれ、本人もよろこ

んで一緒にいく。帰りは同じクラスの子と途中まで一緒に、あとはひとりで帰つてくる。

アルファベットに興味をもちだし、少しずつテキストを使って教える。三週間ぐらいかかり、大文字、小文字を学習し終わり、街の看板のスベルをしまいに読む。また、この頃から子ども向きテレビに興味をもつようになる。

幼稚園には元気でよろこんでいっていたが一方、その他の時間（幼稚園は一時～三時三十分までの午後のクラスであった）は戸外がマイナス30度にもなる寒さのために戸外がマイナス30度にもなる寒さのために、全く家の中などざされ、近くに行き来する友だちもないことから、ひとり遊び、父か母相手に遊ぶことを余儀なくされる。積木、ブロック、組立などのほか、日本にいるときには、あまり集中せず、長づづきしなかつた本に熱中する。読んでもらうこと、ひとりでたどつたり眺めたりすること

にかなりの時間集中する。これは大きな変化だ。また絵をかくこともこれまでよりずっと長時間するようになる。

一ヶ月たった頃、先生にどんなふうにしているかたずねたところ、息子が、時時友だちをぶつたり、つねつねたりするので、止めるよう、静かに遊ぶよう話してほしいと注意をいただき、仰天する。日本ではもっぱらぶたれる側だったのに。

恐らくコミュニケーションの手段なく、どうやって自分のことを友だちに通じてよいか解らず、じれてやむなくぶつたりしてしまうのだろうとふびんになる。

しかしともかく、ぶつたりつねつたりすることはよくないということをよく話してやり、やめることを約束する。日本ではおとなしいおよそ自分から攻撃的になることなどできない子だったので、その変化にはおどろき、考えさせられる。

一方、英語はごくかんたんなものを少

しづつ覚えはじめる。Come on, Here me, Let's goなどおもしろいことに、單語として覚えずに、いずれもこのようなフレーズとしてはいっている。

一週間のちに、先生に会うと、ぶつたりすることもなくなったとのこと、覚えたフレーズをしきりに使って、友だちと接触する。

その後一度だけ、だれかがいじめるから、一緒にいってくくれといつた他は、幼稚園をいやがることは一度もなく、むしろその時間を待ちかねて一番いでかけていくほどである。

これは、

① 家でひとりあそびにあきて、友だとの生活を渴望していること。
② 皆も親切だし、本人も年長であるため、日本でのようになつつけられることもなくむしろ後位に立て、安定していることのためかと思う。

またここでは、小学校前段階として、簡単な算数のようなものをする（ワークブックのような紙で）のも樂しみらしい。時々日本の友だちはどうしているかなということはあるが、日本の幼稚園よりもよいと満足している。

こうしてその後四か月、順調にすごしているが、その間、気のつく点をあげると、◎言語は次第に増えてきたこと、（聞き覚えて）また学習力は私どもと同じくらいあらわしい（テレビをみていて“——”といっている）とよく聞きどる）。さらにそれまでただ聞き覚えであったのが、積極的に、

先週、先生との面接があつて伺うと、単語もフレーズもだいぶうまく使えること。皆とよく協調してよく交わっていること。いつも元気で明るく樂しそうにしていることで、何の問題もないとの話であった。

◎想像力、簡単な表現力がついたこと。テレビをみていても、ことばは解らないので、

（在アメリカ）

画面のはこびから、しきりに筋を自分で作り、想像して楽しむことを（やむなく）するようになる。言葉が通じないとめの苦肉の策とはいえ、見方によつては、よい成長かと思う。

◎ひとり遊びの時間が、圧倒的に多いため、絵をかくことに集中する。これまでの乱暴なかき方、なげやりな絵はなくなり、丹念にこまかくかくようになる。これには、新奇なものが身近にたくさん生じて、これを画材にするようになったこともある。

先週、先生との面接があつて伺うと、単語もフレーズもだいぶうまく使えること。皆とよく協調してよく交わっていること。いつも元気で明るく樂しそうにしていることで、何の問題もないとの話で積極的な學習へ変わってきたようだ。

あつた。

八月号と九月号の大部分を、米国の幼児教育誌 CHILDHOOD EDUCATION の特別号の翻訳にあてた。これは、一九六〇年から一九六五年の間に、同誌に掲載された論文の中から抜粋して編集されたものである。原文は八九頁の小冊子で、平常の号よりもやや厚くなっている。題名は、「幼児期——学習のためのたいせつな時期」と訳したが、原題は、Early Childhood Crucial Years for Learning である。

この号を計画するに当たって、国際幼年教育協会から、次のような厚意ある手紙を受けとっている。

「長い歴史を持つ貴誌が、幼稚園、ナースリースクールの実際および心理学、教育学の理論の向上に貢献しておられますことに敬意を表します。私たちの協会も、七十五年史の編集を終わり、出版を待つばかりになっています。私どもは、貴誌がこの特集号に興味を持たれましたことを嬉しく思います。そして喜んで日本語の翻訳を承諾いたしました。私どもは、翻訳が正確であり、頁数の制限のために縮少されないように望みます。もしもやむを得ない場合には、いくつかの論文を割愛する方がよいと思います。また、販価が高価でないことを望みます。私どもの協会は、利益を求めない団体であり、著者は厚意的に執筆しているのであります。したがって私どもは、

この翻訳版による報酬は、協会の建物の拡張のための寄付として受けとることになつております。三月二十六日—三十一日には、全国大会に、数千人の幼児教育者が集まることになりますが、その掲示板に、「幼児期——学習のためのたいせつな時期」、日本語翻訳進行中と大きな見出しで掲示しました。私どもは、この小冊子が日本の幼児教育者の方がたのお役に立つことを心から願っています。出版されましたら、三部お送りください。敬具
マーガレット・ラスムッセン、編集者」
私どもは、日本の幼児教育界が国際的な視野をもちながら歩んでいくことを望んでいます。しかし、それは、日本の幼児教育の実践の着実な積み重ねがあつてはじめて意味を持つものである。幼児教育の原理は、実際の幼児との間の、愛情の通つた交流の中に生まれるものであつて、それと無関係に、どこかから持つてくるのではない。

私どもは、広く世界のことを学びながら、

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
発行者 津 守 真

幼児の教育 第六十六卷 第九号
九月号 ◎ 定価八〇円
昭和四十二年八月二十五日 印刷
昭和四十二年九月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーべル館

振替口座東京一九六四〇番

◎ 本誌御購読についての御注文は発売所フレーべル館にお願いいたします

我が国幼児教育界の偉大なる先駆者、倉橋惣三先生珠玉の論集

倉橋惣三選集

第四卷 発売

本選集三巻までは、著者倉橋惣三先生自身の手によってまとめられたものを収載したが、この第四巻では著者が長年にわたって諸種の刊行物に印刷発表されたものの中から選択して一書とした。

〈第四巻の主な内容〉

「保育案」保育案の変遷・保育案の立て方

「短言（戦前）」子どものための人形・窓・この秋・

幼児の絵とその解説・幼児と共にいる者の心づくし他

「戦中小編」保母諸君と語る・おもちゃ・大学・隣組幼稚園・遠足幼稚園・他

「戦後小編」小問答「どんでもない」・保育の味・子どもらといっしょに秋をあるく・先生方のマナー・他

「論説」彼らもまた美を求む・幼稚園の新使命・童話

教育の使命・幼児期の教育総説・他

「実際編」系統的保育案の解説・幼稚園でしていること・幼稚園の生活形態・保育案と生活計画・他

「初期の著作」新しき心・一葉女史の小説に現われたる子供・子供のうそ・他

「作詞・書簡・揮毫」アメリカ便り・他

装幀・題字 東山 魁夷
B6判 458頁
特製本ケース入
定価 700円

編集委員

坂元彦太郎・及川ふみ・津守 真

第三巻 468頁
「育ての心」
「就学前の教育」
補著 目次

第二巻 444頁
「幼稚園雑草」
幼稚園雑草の後に
著述目録

第一巻 410頁
「幼稚園真諦」
「子供讚歌」
「フレーベル譜」
「子供讃歌」

……題して幼稚園雑草という。実際に通り雑草である。花としても飾るに足らず、果実としても滋味あるものではない。ただ雑草も枯れて後、土地の肥料になることもあるものだということを聞いて、小さい楽しみとしているのである。(初版の序より)

・「育ての心」は「子どもたちの中にいて『母ものがたり』『子どもの繪しらべ』『名画の子ども』など珠玉の断想集です。

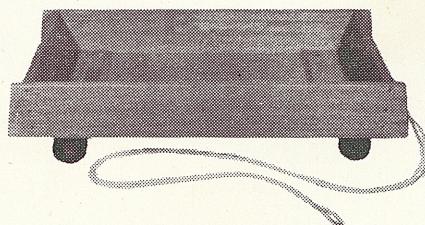
・「就学前の教育」は、岩波講座の一巻として発表された幼児教育論。就学前教育の創始から推移、我が国の就学前教育、就学前教育の本義にまでわたって述べてあります。

既刊 内容 各七〇〇円

ポッポー

キンダーワゴン

定価 5,500円



画期的な箱車キンダーワゴンをご紹介します。深さ・広

さ・高さ・長さなど基本的な問題はもちろん、紐の長さまで

充分研究しました。引きやすい、手をはさまない、重ねられるな

ど、機能的にもすぐれています。そのうえ、がんじょうさ、スマートさ

、素朴さも決して忘れていません。かわいい遊びの発明家たちは、この

キンダーワゴンを、なにに仕立ててくれるでしょうか？ 船・汽車・自動車・

飛行機…それとも夢の馬車？ 夢を育てるキンダーワゴン、活発な遊びが展開され

るよう、ボディは上質の木製、連結もできます。紐はじょうぶなナイロンロープです。

規格・たて86cm・よこ40cm・高さ23cm・箱の深さ11.5cm・ナイロンロープ360cm

〈運動具研究会推選〉